

歸スルヤ判然ナラサル譯合ナルニ原裁判所ハ一概ニ〔假令前歩ノ定マラサルモ本訴争ヒ
ノ起ラサル迄ハ其自認ノ義務ハ盡了シ夫々証佐ヲ備フヘキニ之ヲ爲シ克ハサルヲ觀レハ
被告^{〔人〕}カ義務怠ラサルトノ陳辨ハ採用スルニ由ナシト〕言渡タルハ審理ヲ盡サ、ル
不當ノ裁判ナリトス

第二條

前第二項ヲ審按スルニ被告上告人カ貸地明渡ヲ請求スル理由ハ自己ノ宅地^{〔他ヨリ〕}ヲ明渡
スニ依テ上告人ニ對シ其貸地ヲ取戻度トノコナリシモ控訴審理中其申立ヲ取消シ更ニ貸
地米淹滞ヲ以テ地所取戻ノ理由ト爲シタリ然レハ其貸地米淹滞タル果シテ上告人ノ怠リ
ニ出タルモノト決スルニアラサレハ之レカ訟求ハ相立サル筋合ナルニ原裁判所ハ前第一
條辨明ノ如ク未ダ其審理ヲ盡サスシテ其責ヲ上告人ニ歸シ隨テ〔地所ニ在テハ原告^{〔被〕}
人^{〔カ〕}貸置ニ於テハ格別若肯セサレハ返戻スヘキモノナリ〕ト言渡タルハ不當ナリトス

第三條

前第三項ヲ審按スルニ原裁判所ニ於テ被告上告人ハ本訴貸地米ハ壹畝ニ付五斗ナリト主張
シ上告人ハ壹斗八升ナリト論述シタリ而シテ原裁判所ハ壹畝ニ付壹斗八升ヲ以テ相當ト
判定シタルモノナレハ上告人ノ申立ノ一部分ハ直トナリタルモノナリ然レハ訴訟入費ハ
各自辨タルヘキニ上告人ニ擔當セシメタルハ不法ナリトス

判決

前條々ノ如クナルヲ以テ原裁判中本案上告ニ係ル部分ヲ破毀シ名古屋控訴裁判所ニ移スニ

ニ付更ニ同廳ノ裁判ヲ受クヘシ

但上告入費ハ被告上告人ノ擔當タルヘシ

第百廿九號

○貸金催促一件上告ノ判文 明治十六年十一月七日上告
明治十七年三月十四日申渡

石川縣加賀國石川郡松任新
町坤二百二十三番地平民森
田傳平代理人東京府麴町區
有樂町三丁目一番地

齋 藤 孝 治

上告人

石川縣加賀國石川郡松任新
町坤二百二十五番地平民長
谷川吉忠代人同縣同國金澤
區高岡町八十七番地士族

上 森 八 十 次

被告上告人

貸金催促ノ一件大阪控訴裁判所裁判ヲ不法ナリトシ破毀ヲ求ル上告ノ要領左ノ如シ
上告ノ要點

上告者ヨリ提供スル甲第一二號証ハ別ニ被告上告者ヨリ反對ノ証據ヲ提出セサルニモ關セ
ス原裁判所ハ被告上告者ノ偏言ニ仍リテ其証據ノ効力ナシトノ裁判ヲ與ヘラレタルハ甚ダ

不法ノ裁判ナリト云フニ在リ

五八八

第一條

法律ノ格言ニ「人ハ其自己ノ不正ヨリシテ利益ヲ取ルコトヲ得ス」トアリテ此ノ語ノ旨趣ハ假令ハ自己ハ不正ノ事ヲ爲シ又ハ爲サントセリトノ事ヲ述ヘテ結局其己レヲ利スルコトヲ得スト云フニ在リテ誠ニ動カス可カラサルノ論理トス

今被上告者ニ於テ本訴抗辨ノ旨趣ハ明治十四年十二月十六日甲第一號証借用証書ヲ上告者ニ差入タルニ相違ナシ而シテ明治十六年二月十二日甲第二號証ノ如ク返濟猶豫ヲ請フノ証書ヲモ差入タルニ相違ナシト雖モ右ノ二証書ヲ上告者ニ差入タルハ全ク虚構コシテ其實ハ被上告者乙第一號証ニ明記アル四百圓ヲ上告者ニ渡シタルノ事實ハ之レヲ其妻ノ實父上森八十次ニ隠シ置テ上告者ヨリ買入タル家屋代價ノ全部ヲ八十次ニ拂ハシムルカ爲メニ右家屋買入代價ノ殘金二百五十圓ノ証書ヲ上告者ニ交附シテ其表面ヲ假飾シ上森八十次ヲ欺罔シテ右ノ殘額ヲ出金セシメ被上告者乙第一號証ノ金額四百圓ヲ私有セントノ計畫ニ出シナリ故ニ今實際精算セハ乙第一號証ノ四百圓ト上森八十次ノ家屋ヲ上告者ニ賣ラシメタル六百圓ノ金額トヲ合算セハ即チ千圓ノ金額ニシテ却テ百圓ノ過剩アリトノ事ハ被上告者カ抗辨ノ撮要トス故ニ以上抗辨ノ旨趣ヲ尙ホ略説セハ被上告者ハ上森八十次ニ其家屋ヲ賣ラシメテ尙乙第一號証ノ金額四百圓ヲ私有センカ爲メニ二百五十圓ノ金額ヲ出サシムヘキ欺罔ノ手段ノ爲メニ甲第一二號証ノ上告者ニ差入タルナリト云フニ過キサルナリ故ニ被上告者ノ申立ハ取りモ直サス己レ自カラ不正ノ事ヲ爲シ又ハ爲サ

ントセリトノ事ヲ述ヘテ結局甲第一二號証ノ義務ヲ免カレテ利益ヲ取ラント爲スモノニ外ナラス不法ノ申立ト云ハサルヲ得ス

第二條

然ルニ原裁判所ニ於テハ乙第一號証中(即金請取)トアル金四百圓ト八十次ヲシテ上告者ニ賣ラシメタル乙第二號証四號証ノ家屋代金六百圓トヲ合スレハ上告者ヨリ被上告者ニ賣渡シタル家屋代金九百圓ヨリ百圓ノ超過アリ故ニ假令甲第一二號証ノ上告者カ手裏ニ保存シアルモ其効力ヲ有セサル者トノ御判定ナリト雖モ必竟原裁判所ハ被上告者ニ於テ上森八十次ヲ欺罔センカ爲メノ假設ニ甲第一二號証ヲ差入タルナリト云フノ申立ニ據リテ乙第一號二號又ハ四號証ノ明文ニシテ仍テレタルノ裁判ナリト雖モ前條ニモ述フルカ如ク被上告者ノ申立ハ必竟自己ニ不正ノ事ヲ爲シタリトナシテ終局利益ヲ得ントスルノ申立ニシテ實ニ不正ノ事ハ尙モ裁判上ニ於テ決シテ假定スヘキモノニ非ス又乙第一號二號又ハ四號証ノ明文ニ據テ見レハ誠ニ上告者ハ被上告者ヨリ金千圓ヲ受領セシモノ、如シト雖モ果シテ乙第一二號証ノ如ク明治十四年一月ト四月トニ合金千圓ヲ上告者ニ渡シタルノ精算ナリトセハ右金圓ノ受授ヨリ以後十四年十二月ニ甲第一號証借用証書ノ成立ツヘキ謂レナシ況ンヤ明治十六年二月ニ成立タル甲第二號証ニ於テチヤ而シテ凡ソ証據書ハ前後反對ノ証書アルニ於テハ最後ノ証書ヲ以テ以前ノ証書ヲ取消シ得ヘキ程ノカアルモノトス決シテ別段ノ証據ナキ限りハ前ノ証書ヲ以テ後ノ証書ノ取消ノ得ヘキモノニ非サルナリ故ニ今本訴ニ於テ証書ノ明文ニシテ仍テ見シハ被上告者ハ上告者ニ既ニ千圓ヲ

五八九

渡シタリト云フノ証アリト雖モ該証成立ノ後更ニ本訴兩造甘諾上受授シタルノ甲第一二號証書ノ効力ナシト云フ事ヲ得サルノミナラス却テ此ノ証書ニ仍テ見レハ尙ホ被上告者ヨリ上告者ニ渡スヘキノ金圓アルヲ充分ニ証シ得ヘキナリ然ルニ被上告者ハ別段ニ甲第一二號証書ニ反對ノ証據ヲモ提出シタルニ非ス只管自己カ義務ヲ免カレントシテ遂ニ破廉耻ヲモ顧ミス八十次ヲ欺罔シテ私利ヲ營マンカ爲メ不正ノ手段ヲ行ヒシナリシトノ申立ヲ爲シテ原裁判所ニ於テモ遂ニ裁判上其不正ノ事實ヲ公ケニ假定セラレシトハ甚ク不法ノ裁判ナリト云ハサルヲ得ス

第三條

「詐偽ノ巧ミニ之ヲ飾ルハ真正ノ事實ヨリモ却テ更ニ信スヘキ者多シ而シテ詐偽ハ屢々事實ト條理トニ勝ツ」トハ誠ニ經驗ニ富ム者ノ格論トス
 今本訴兩造ニ於テ始審以來甲第一二號証成立ノ事實ノ上申ハ始審御判決ノ如ク甲第一號証ノ成立ハ兎角正シキ算當ニ出シモノニ非サルニ仍リ兩造ノ供述其眞偽ヲ認ムルニ由ナキカ如シ」トアリテ何レモ証據ニ符合セサルノ申立ナルカ如シト雖モ抑モ甲第一二號証ノ成立ハ明治十四年一月中上告者ノ家屋ヲ被上告者ニ代價金九百圓ニ賣渡シタルノ當時乙第一號証ニ明記アルカ如ク内金四百圓ヲ受取リテ殘金五百圓ハ一ヶ月二分ノ利子ヲ加ヘテ其年八月ヲ皆濟期限トナセリ而シテ尙ホ同年十二月被上告者ノ妻ノ實父上森八十次所有ノ家屋ヲ乙第四號証ニハ六百圓ニ賣買シタルカ如シト雖モ其實四百圓ヲ買受ケ九百圓ノ内二口合シテ八百圓ヲ受取タレハ殘金百圓ト及ヒ五百圓ノ利子ト上告者ノ尻大井

新太郎ハ乙第三號証等ノ如キ關係アルカ故ニ嘗テ同人ヨリ被上告者ヘ貸シ與ヘタルノ金圓トサ三口合シテ幾分ハ切捨勘辨ヲ加ヘ諸局甲第一號証ノ約定ヲ取結ヒタリ然レハ被上告者ハ尙ホ其返濟期日ヲ經過シテ該貸金ヲ返濟セサルカ故ニ更ニ甲第二號証ノ如ク明治十六年二月ニ至リ返濟猶豫ヲ與ヘタル次第ニシテ他ノ事實アルニ非ス然レハ上告者ヨリノ申立中上森八十次ノ家屋ヲ買入タルノ代價ハ乙第四號証ノ如ク六百圓ニハ非スシテ四百圓ナリシト云フノ証據ハ之レヲ提出スルヲ得ス又上告者ノ兄大井新太郎ハ被上告者ニ貸金アリトノ事ハ被上告者モ認メタルノ事實ナリト雖モ右ノ貸金ハ甲第一號証中ニ合算セリトノ証據ナリ又乙第二號証ハ該証成立ノ當時ニ該家屋ノ引渡シヲ受ケタルニ非スシテ只被上告者カ依頼ニ仍リテ之レヲ與ヘ置キタルニ過キサルカ故ニ從ツテ該家ノ支配モ被上告者ニ於テ爲シ來リシ証據ハ甲第三號証ニ明カナリト雖モ是レ亦充分ノ反証ニ非ストセハ上告者ノ申立ハ乙號証書ニ協ハサルノ供述ナルカ如シト雖モ事實如斯次第ナレハナリ結局甲第一號証ヲ被上告者ヨリ差入タル次第ニシテ且甲第二號証ヲモ亦差入タルモノナリトス

然ルニ被上告者ハ不正ノ事ヲ爲シタリト云フヲ根基ト爲シテ巧ニ諸証據書ニ協フカ如キノ申立ヲ爲シ九百圓ニ對シテ千圓ト及ヒ甲第一號証トテ渡シタルモノナリトノ陳供ハ所謂巧ニ飾リテ遂ニ終審ノ裁判ニハ真正ノ事實ニ勝ツヲ得タリト雖モ果シテ被上告者カ申立ノ如ク乙第一號証ノ四百圓ヲ上告者ニ渡シタルノ事實ヲ上森八十次ニ秘シテ甲第一號証ノ金額二百五十圓ヲ同八ニ出サシメタル後彼ノ四百圓ヲ私有セシトノ計畫ニ出シト

セハ其証據ヲ明示セサル可カラズ又被告者ハ乙第四號証ノ金額ト甲第一號証トノ金額ヲ以テ上告者ニ對スルノ家屋買入代價ナリト云フト雖モ合計八百五十圓ニシテ未ダ九百圓ニハ滿タサルナリ故ニ被告者ハ其事實ヲ覆ハンカ爲メニ別ニ金五十圓ヲ渡シタリト述ヘテ結局四百圓ハ渡シ過キ金ナリト云フト雖モ是レ亦無証ニシテ且事實上告者ノ該金圓ヲ受取リシコトハ非ラサルナリ

故ニ上告者ノ申立中或ハ無証據ノ申立アリト雖モ被告者ノ云フ所モ亦素ヨリ無証據ニシテ毫モ據ルヘキナシト雖モ兎ニ角甲第一二號証ハ其貸借ノ事實ナリシテ最後ニ成立タルコトハ非ラサルナリ

第四條

前條々述フルカ如ク被告者ヨリハ他ニ別段ノ反証ヲ擧ケサル限リハ乙號証ヨリモ以後ニ成立タルノ甲第一二號証ハ假令其以前ニ如何ナル事實アリトスルモ結局精算上甲第一二號証ノ結果ヲ生シタリト爲スヘキノ道理ナルカ故ニ今更被告者ニ於テ其義務ヲ免カサルコトヲ得ス然レモ今假リニ一步ヲ讓リテ單ニ証書面ノ如ク被告者ヨリハ金千圓ヲ上告者ニ受取リタルモノトセハ右金額ノ内九百圓ヲ差引殘金百圓ハ上告者ニ返償スヘシト雖モ甲號証書ノ如キモ亦證書面ノ如ク被告者ヨリ其義務ヲ盡サ、ル可カラズ何ントナレハ今上告者ニ於テ乙第四號証家屋買入ノ金額ハ證書面ノ如ク六百圓ニハ非スシテ四百圓ナリト申立ハ誠ニ遺憾ナカラ其證據ナシト雖モ被告者ニ於テ甲第一號証ハ虛構ニシテ甲第二號証モ同一ナリト云フノ申立モ亦其證據ナシ而シテ凡ソ證據ト其成立ノ當時

ハ其證據ノ如キ事實アルコト非ラサレハ決シテ成立ツヘキモノニ非ラス故ニ今此ノ論理ニ仍リテ乙第一二號及ヒ四號証モ其事實アリトセハ甲第一二號証モ亦其事實アリシモノト爲サ、ルヲ得ス然ルニ原裁判所ハ乙第四號証ニ就テハ上告者ニ其反証ヲ擧ケサルヲ責メテ被告者ニハ甲第一二號証ノ反証ヲ擧スヘキヲ責メス只々單ニ被告者カ申立ノ事實ノミヲ探リテ結局裁判上不正ノ事實ヲ認メテ甲第一二號証ノ効ナシト云フノ御判定ヲ與ヘラレタリトハ實ニ不法ノ裁判ト云ハサルヲ得ス

被告者ハ本案上告ノ訴旨ニ對シ原裁判所ノ裁判不當ナラサル旨ヲ辯護セリ

辨明

本訴ニ對シ審判ヲ與フヘキノ要點ハ左ノ二項ニ在リ

一本訴ニ關シ兩造カ申立ノ事實ハ孰レヲ眞實ナリト認ムヘキヤ否ヤ

二上告第一二號及ヒ被告二三五號証ハ果シテ孰レカ虛構ニ出タルモノナルヤ否ヤ

第一條 本訴ニ關シ兩造カ申立ル事實ノ概略ハ載セテ始審判文ニ在リ今右兩造カ申立ル事實ヲ以テ之ヲ其諸證ニ參照スルニ其諸證上更ニ右ノ事實アリシコトヲ徵スヘキモノナシ依テ本訴ノ事實ハ果ノ孰レノ申立カ眞實ナリシヤハ共ニ之ヲ信認スルニ由ナキモノトス

第二條 本訴事實ノ如何ハ前條辨明ノ如クナルヲ以テ上告第一二號及ヒ被告二三五號証ハ孰レモ皆虛構ニ非スシテ之ヲ眞實ノモノナリトセサルヲ得ス然レモ上告第一號証ハ本訴兩造カ互ニ家屋地所ヲ賣買シ其代價等差引決算ノ未成立タルモノナレハ假令表面被告第一五號証上被告者ハ反テ上告者ニ對シ百圓ノ過渡金アルカ如シト雖モ被告

者ハ上告第一號證ニ對スル反證ヲ傾収シ置カルノミナラス仍ホ上告第二號證ヲ交付シタルニ據レハ被上告者ハ右差引決算上上告第一號證ノ義務ヲ負擔スヘキ然ルヘキノ原因アリテ該證ヲ上告者ニ交付シタルモノト認定セサルヲ得ス

判決

前條々辨明ノ如クナルヲ以テ大阪控訴裁判所カ明治十六年八月廿八日本訴ニ與ヘタル裁判ヲ破毀シ更ニ本院ニ於テ判決スル左ノ如シ
前ニ説示スル如クナルヲ以テ被上告者ハ上告者ニ對シ甲第一號證ノ義務ヲ負擔スヘシ但シ訴訟入費ハ被上告者ニ於テ辨償スヘシ
第三百三十號

○過金ヨリ生スル損害要償上告ノ判文明治十六年十二月廿四日上告
明治十七年三月十四日申渡

- 神奈川縣橫濱區湊町二丁目
- 十二番地太田源助方同居平民太田源左衛門代官人
- 東京府京橋區南鍋町二丁目
- 五番地寄留神奈川縣平民
- 太田英壽
- 神奈川縣橫濱區尾上町一丁目
- 目五番地平民

上告人

被上告人

右代官人

- 八田清兵衛
- 東京府京橋區元數寄屋町四丁目一番地寄留愛媛縣士族
- 河村 訥

過金并該金ヨリ生スル損害要償一件東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法トシ破毀ヲ求ムル上告ノ要領左ノ如シ

第一條

原裁判所ノ判決文第四條ニ「上乙第七八九號證ノ金額モ原告償却ノ義務明白ニ付併セテ年六朱ノ利子ヲ加算シ第一條第二條ノ金額ト相殺ス可キモノトス」トアリ然ルニ該乙第七八九號證ノ金額ハ甲第四號證乙第二號證第三項ノ如ク被上告人カ認諾ニ係リ乙第一號證ノ裏書金一万二千八百八十圓ニ含有スルモノコテ乙第四號證即大坂控訴裁判所ノ判決及ヒ甲第五號證即本院判決ノ如ク既ニ確定ノ金額ナレハ今更之レヲ以テ本案義務相殺ノ資料トナスヘキノ理由ナシ然ルニ原裁判所ハ第一條第二條即チ重複利子等ノ金額ト相殺スヘキモノトセラレタルハ寔ニ不法ナリト思考ス

第二條

而シテ乙第九號證ハ乙第八號證ノ内譯明細書ナルニ之レヲ兩箇特別ノ金額ナリトシ又乙第七號證ハ始審判決第七條ニ於テ確定シ上告人カ控訴セサル點ニテ被上告人カ答辨書ニモ之ヲ述ヘス然ニ乙第七八九號ヲ併セテ相殺ヲ爲スヘキ者ト判定セラレタリ之レ尤不當

ノ甚シキモノト思考ス

明治十七年三月八日辨駁書ヲ差出セリ

被上告人ハ右上告ノ旨趣ニ對シ原裁判不法ナラサル旨辨護セリ

辨明

上告要旨第一條ヲ審按スルニ被上告第七八九號證ノ金額カ上告第四號証第三項及ヒ被上告第一號証ノ裏書金額ノ内ニ包含スルモノナルコトハ被上告者カ嘗テ異論ナキ所タリ然シテ右金額ハ被上告第四號及ヒ上告第五號證ノ如ク既ニ確定シタルモノナレハ今更被上告第七八九號證ノ金額ヲ以テ原判文第一條第二條ノ金額ト相殺ス可キ謂ハレナキモノトス然ルニ原裁判所ハ其判文第四條ニ於テ(乙第七八九號證ノ金額モ中第一條第二條ノ金額ト相殺スヘキモノトス)ト判決シタルハ不當ナリトス

右辨明ノ如クナルヲ以テ原判文第四條中被上告第七八九號證ニ對スル裁判ヲ破毀シ更ニ本院ニ於テ判決スルコト左ノ如ク
前ニ說示スル如クナルヲ以テ被告被上告者ハ其第七八九號證ノ金額ヲ以テ原告上告ニ對シ原判文第一二條ノ金額ト相殺テ求ムルノ權理ナキモノトス
但訴訟入費ハ被告ノ負擔タルヘシ
第百卅一號

○柴草山地券面創定一件上告ノ判文
明治十七年一月十六日上告
三月十四日申渡

島根縣出雲國神門郡所原村

上告人

一番地平民

成相岩三郎

外二百八十五名

上告人兼右總代

同村平民

今岡紋次郎

外九名

右代理人

同縣同國音宇郡堅町平民

江角利右衛門

島根縣出雲國神門郡渡橋村

平民

被上告人

北村夫右衛門

外九十六名

上告者カ廣島控訴裁判所ノ裁判ヲ不當トシ之カ破毀ヲ請願スル主點ハ要スルニ左ノ二個ノ條件ニ止マル者トス

第一 原判文中ニ「慣行成跡ノ如何ヲ問ヘハ」云々トアレハ其慣行成跡ノ取調ハアラサル可シ如何トナレハ論山ハ往古ヨリ上告一ヶ村ニ於テ自由ニ進退シ來リタル者ニシテ被上告渡橋村ハ享保十三年ヨリ單ニ鎌樵ノ入會ヲナシ來リタルノミナレハ上告村ト共同シテ論山ヲ所有スルノ慣行成跡アラサレハナリ然ルニ原裁判所ハ前段ノ如ク更ニ其實

アラサル慣行成跡ニ掲ケラレタルハ不當ノ裁判ナリトノ
 第二 原告被告共山札米ヲ官納シ「云々トアレハ山札米ト稱スル者ハ其原因
 不詳舊藩ノ時ヨリ山地ノ無有ニ拘ラス各村ノ高割ヲ以テ上納スル者ナリ其証據ハ被上
 告村カ未ダ論山へ入會セサル寶永年度ニ於テ既ニ山札米ヲ上納シタル証跡ニ就テ判然
 ナリ然ルチ原裁判所ハ該山札米ヲ以テ論山ノ租税ノ如ク判決セラレタルハ不當ナリト
 ノ
 大審院ハ右ノ上告ニ對シ辨明及ヒ判決ヲ與フルコト左ノ如シ

辨明

上告第四號證即チ當時ノ組頭ヨリ上告村々吏ニ宛テタル書面ニ據レハ「村方四十四枚御
 札數ニ候得共此内二十二枚夏之中毎日山草下鹽治へ荷セ候様ニ村中へ御申達可有之候云
 々」トアリ又上告第八號證即チ組頭ヨリ下鹽治村々吏へ宛テタル書面ニモ「山札四十四枚
 ノ内二十二枚所原へ申付云々」トアルノミナラス被上告第三號證即チ縣備ノ租税帳ニ據
 レハ「所原村米二石三斗山札米二十三枚」トアリ是等ノ証據ニ依リ之ヲ推考スレハ上告村
 モ亦太古來ヨリ山札ヲ所持シ山札米ヲ官納セシ者ノ如シ」上告者ハ右山札米ト稱スル者
 ハ山札ニ非ス其証據ハ被上告村カ未ダ論山へ入會セサル寶永年度ニ於テ山札米ヲ上納セ
 リト云フモ被上告村カ論山へ入會セシハ果ソ上告者申立ノ如ク享保十三年度以降ニ係ル
 ヤ上告者カ該年度以降ナリト証スル上告第五號及ヒ第二十四號証ニ於ル其第五號証ニハ
 單ニ「丑ノ十一月」トノミアリテ其年號ノ記載ナケレハ何レノ年度ニ成立ナタル書面ナル

ヤ之ヲ知ルニ由ナキヲ以テ假令該書面中ニ「最早四十年余ニ相成云々」ト書載アルモ此四
 十餘年前ハ果シテ享保十三年度ニ相當セル者ナルヤ亦之ヲ知ルニ由ナシ又第二十四號
 証ハ元來上告村ノ調製ニ係リシ書面ナレハ果シテ當時ノ郡方へ差出シタル書面ナリトノ
 他ニ之ヲ體ムルノ証據アルニ非サレハ假令該証中ニ「六十五年以前申年渡橋村へ二十五
 枚札下ニ被仰付云々」トアルモ之ヲ以テ被上告村カ山札ノ下附ヲ受タルハ果シテ享保十
 三年度ナリト確認スルコト得ス好シヤ該年度ニ於テ札下ヲ受タル者トスルモ上告第八號
 証中ニ「下鹽治村ヨリ所原山札下之義數年來及出入山行中絶居申候所此度仲滿及衆評古
 來所原へ行來候手掛リ茂有之候處山札四十四枚ノ内二十二枚所原へ申付云々」トアルニ
 依レハ其下鹽治村ニ於テ札下ヲ受タルハ寶曆九年七月中ナルニ其以前ヨリ論山へ立入り
 來リタルコトハ右証書ノ文詞ニ於テ明瞭ナレハ其下鹽治村ヨリ以前ニ山札ノ下附ヲ受ケタ
 ル被上告村ナレハ其山札ノ有無ニ拘ラス古來ヨリ論山へ入會ヒ來リシコトハ之ヲ推定スル
 ニ足レリトス然レハ享保度ヨリ以前ナル寶永年度ニ於テ被上告村カ山札上納シタリト
 テ別段怪ム可キニ非サレハ之ヲ以テ山札米ハ山札ニアラストノ証據ト爲スヲ得ス」猶ホ
 上告被上告村カ從來官納セシ所ノ山札米ハ山札上納シタリトノ事實ヲ體カメシコト被上告第七號
 證即チ被上告外一ヶ村ヨリ島根縣廳へ伺出タル書面ニ「山札ト稱スル者ハ舊藩政ヨリ下
 附セラレ其稅米タル者ハ山札一枚ニ付現米一斗一升一合宛ノ上納致候處該山札タルヤ明
 治八年第二十三號公布廢稅種目中ニ在ル山札トハ御旨意異ナル者ト奉存候得共爲念相伺
 候」トアルニ對シ「伺之通」ト指令アリ而シテ被上告村へ下附セラレタル山札ノ員數ニ於ル

二十五枚ナルコトハ上告被告上告者カ申口符合スルヲ以テ該札數ヲ右一枚ニ付壹斗壹升壹合ノ割ニテ計算チナス時ハ其米額貳石七斗七升五合トナリ尤モ明治五年以前ニ在テハ山ヲ以テ貳石五斗被上告村カ官納セシ即チ被上告第四號証ナル縣備ノ簿冊ニ登記アル所ノ宛チ官納セリ米額ト符合スルノミナラス彼ノ有名無實ナル山札米ハ總テ被上告第九號証ノ如ク明治七年十二月申縣達チ以テ廢セラレタルニ上告被上告村カ從來官納スル所ノ山札米ハ依然徵收セラレ、所ニ就テ之ヲ考フルモ該山札米ハ上告者ト主張スル如キ者コアラズシテ即チ論山ヘ對スル官納ノ山租ナリト看認ルニ充分ナル証憑アリトス」抑上告村ハ論山ノ地元村ナルヲ以テ從來被上告村トハ其入會ノ權限ニ於テ或ハ差等アルヘシト雖モ右ニ辨明スルカ如ク上告被上告村共往古ヨリ互ニ入會シ山札ヲ所持シ山札米チ官納スル論山ナレハ今日該山ノ民有地ニ歸スル以上ハ其入會ノ權限ニ好シヤ差等アルモ地元村一村ノ所有トナスノ理由アラサレハ其土地ハ上告被上告村ノ共有地ト爲スチ至當ノ筋合ナリトス」以上ノ理由ナルヲ以テ原裁判所カ結局「該地ハ三ヶ村ノ共有山ニシテ柴草蒔取方ハ仍ホ從前ノ通りタルヘキ者トス」ト判決シタルハ相當ノ裁判ナリトス

判決

右辨明ノ節合ナルニ付廣島控訴裁判所カ本件ニ對シ言渡シタル裁判ハ破毀セサル者也
第百卅二號

○柴草山地券面創定一件上告ノ判文明治十七年一月十六日上告
三月十四日申渡

島根縣出雲國神門郡所原村

上告人

一番地平民

成相岩三郎

外二百八十五名

上告人兼右總代

同村平民

今岡紋次郎

外九名

右代理人

同縣同國音宇郡堅町平民

江角利右衛門

島根縣出雲國神門郡下盤治

村平民

神門原太郎

外二百四十七名

被上告人

上告者カ廣島控訴裁判所ノ裁判チ不當トシ之カ破毀チ請願スル主點ハ要スルニ左ノ二個ニ止マル者トス

第一 原判文中ニ「慣行成跡ノ如何チ問エハ」云々トアレハ其慣行成跡ノ取調ハアラサル可シ如何トナレハ論山ハ往古ヨリ上告一ヶ村ニ於テ自由ニ進退シ來リタル者ニシテ被上告者下盤治村寶曆九年ヨリ單ニ鎌樵ノ入會チナシ來リタルノヨナレハ上告村ト共同シテ論山チ所有スルノ慣行成跡アラサレハナリ然ルチ原裁判所ハ前段ノ如ク更ニ其實

アラサル慣行成跡ヲ掲ケラレタルハ不當ノ裁判ナリトノ
 第二 原告被告共山札米ヲ官納シ云々トアレハ山札米ト稱スル者ハ其原因
 不詳舊藩ノ時ヨリ山地ノ有無ニ拘ラス各村ノ高割ヲ以テ上納スル者ナリ其証據ハ被上
 告村カ未ク論山へ入會セサル寶永年度ニ於テ既ニ山札米ヲ上納シタルハ証據ニ就テ判
 然ナリ然ルチ原裁判所ハ該山札米ヲ以テ論山ノ租税ノ如ク判決セラレタルハ不當ナリ
 トノ
 大審院ハ右ノ上告ニ對シ辨明及ヒ判決ヲ與フルヲ左ノ如シ

辨明

上告第六號證即チ當時ノ組頭ヨリ上告村々吏ニ宛テタル書面ニ據レハ「村方四十四枚御
 札數ニ候得共此内二十二枚夏之中毎日山草下掘治へ効セ候様ニ村中へ御申達可有之候云
 々」トアリ又被上告第一號證即チ組頭ヨリ被上告村々吏ニ宛テタル書面ニモ「山札四十四
 枚ノ内二十二枚所原へ申付云々」トアルノミナラス本件ト連帶ノ詞訟ナル即チ上告村ヨ
 リ渡橋村へ對スル上告事件ノ被上告第三號證即チ縣備ノ簿冊ニ據レハ「所原村米二石三
 斗山札米二十三枚」トアリ是等ノ證據ニ依リ之ヲ推考スレハ上告村モ亦古來ヨリ山札
 米所持シ山札米ヲ官納セシモノ、如シ」上告者ハ右山札米ト稱スル者ハ山札米ニ非ス其証
 據ハ被上告村カ未ク論山へ入會セサル寶永年度ニ於テ山札米ヲ上納セリト云フモ被上告
 第一號證中ニ「下鹽治村ヨリ所原山札下之儀數年來及出入山行中絶居申候所此度仲溝及
 衆評古來所原へ行來リ候手掛リ茂有之候所山札四十四枚ノ内二十二枚所原へ申付云々」

トアルニ依レハ被上告村ハ其山札ノ下附チ受ケタルハ寶曆九年中ナルモ其以前ヨリ山札
 ノ有無ニ拘ラス論山へ立入り來リタルヲ右證書ノ文詞ニ於テ明瞭ナリト云フ可キナリ
 然レハ寶曆度ヨリ以前ナル寶永年度ニ於テ被上告村カ山札米ヲ上納シタリトテ別段怪ム可
 キニ非サレハ之ヲ以テ山札米ハ山札米ト稱スルノ證據ト爲スチ得ス」猶ホ上告被上告村
 カ從來官納セシ處ノ山札米ハ山札米ト稱スルノ事實ヲ儘カメシコ被上告第十號證即チ被上告
 外一ヶ村ヨリ島根縣廳へ伺出タル書面ニ「山札ト稱スル者ハ舊藩政ヨリ下附セラレ其稅
 米タル者ハ山札一枚ニ付現米一斗一升一合宛ノ上納致候處該山札タルヤ明治八年第二十
 三號公布廢稅種目中ニ在ル山札トハ御旨意異ナル者ト奉存候得共爲念相伺候」ト有ニ對
 シ「伺之通」ト指令アルノミナラス彼ノ有名無實ナル山札米ハ總テ被上告第六號證ノ如明
 治七年十二月中縣達ヲ以テ廢セラレタルニ上告被上告村カ從來官納スル所ノ山札米ハ依
 然徵收セラル、所ニ就テ之ヲ考フルモ該山札米ハ上告者カ主張スル如キ者ニアラスシテ
 即チ論山へ對スル官納ノ山札米ト認ルニ充分ナル證據アリトス」抑モ上告村ハ論山
 ノ地元村ナルチ以テ從來被上告村トハ其入會ノ權限ニ於テ或ハ差等アルヘシト雖モ右ニ
 辨明スルカ如ク上告被上告村共往古ヨリ互ニ入會シ山札米所持シ山札米ヲ官納スル論山
 ナレハ今日該山ノ民有地ニ歸スル以上ハ其入會ノ權限ニ好シヤ差等アルモ地元村一村ノ
 所有トナスノ理由アラサレハ其土地ハ上告被上告村ノ共有地ト爲スチ至當ノ筋合ナリト
 ス」以上ノ理由ナルチ以テ原裁判所カ結局該地ハ三ヶ村ノ共有山ニシテ柴草刈取方ハ仍
 ホ從前ノ通りタルヘキ者トス」ト判決シタルハ相當ノ裁判ナリトス

判決

右辨明ノ筋合ナルニ付廣島控訴裁判所カ本件ニ對シ言渡シタル裁判ハ破毀セサル者也
第百卅三號

○貸金催促上告ノ判文明治十六年八月十三日上告
明治十七年三月十五日申渡

神奈川縣相模國陶綾郡一色
村平民露木タカ代理人東京
府神田區猿樂町廿一番地平
民

上告人

角 田 眞 丞

被上告人

吉 崎 廣 福
同縣同國同郡同村平民
吉 崎 兵 三

貸金催促一件東京控訴裁判所ノ裁判ヲ不法トシ破毀ヲ求ムル上告ノ要領左ノ如シ

一 解釋ノ上ニ於テ證書夫レ自ラニハ一點ノ疑ナキモ事實ニ相違スルカ爲メ其證書ノ無効
ニ歸スル場合往々ニシテ有シ然ルニ被上告四號證ハ夫レ自ラニ於テモ甚ダ解釋ニ苦
ムモノナリ

一 原裁判所ノ判定ハ事實ノ如何ハ審理ヲ盡サスシテ只被上告四號證夫レ自ラニ就キテノ
解釋ト夫レ自ラノ數文字ノ鑑定トニ過キサリシナリ夫レ故ニ事實ニ違フタル裁判ヲセ
ラレタルナリ

一 原裁判所ハ被上告四號證ノ解釋ヨリシテ他ノ事實ハ既ニ双方間ニ權義ナキモノナリタ
リト判定セリ而シテ此判定ヲ爲スニ「貳千圓ヲ原告カ被告ヨリ借り入レノ當時被告ハ
現金五百圓ト七百九拾五圓七拾五錢ノ預リ金證文トヲ原告ヘ渡シタルノミニシテ余ハ
精算ヲ爲サ、ルヲ以テ」云々ト明記シ全ク被上告一己カ無證據ノ陳述ヲ採用シ之ヲ信
ナリトシタルヨリ遂ニ有證ナル上告者ノ辨論ニハ意ヲ注メヌ却テ被上告第四號證ハ四
通ノ證書ト交換スヘキモノト誤判ヲ爲シタルナリ

一 以上ノ記述ニ由リ本件上告ノ趣旨ハ審理不盡ト無證ノ陳述ヲ採用シ有證ノ辨論ヲ排斥
シタルハ不法ノ裁判トニハ服シ難シト云フニ在ルコトハ知ラルヘキナリ

一 本件ヲ定ムルハ原裁判狀ニ云フ當初ノ上告者ニ於テハ其全額ヲ渡サスノ五百圓ノ證書
四通ヲ落手シアリタルモノナルヤ否ヤヲ決定セハ被上告四號證ハ五百圓ノ證文一通ト
引換ユヘキモノナルヤ四通ト引換ヘキモノナルヤ判然スヘシ何トナレハ被上告四號證
ハ五百圓ノ金額ノ爲メニ成立タルモノニシテ五百圓ヲ四個合セタル(即證文四通分)ニ
千圓ノ爲メニ成立タルモノニアラサル事ハ双方異議ナキ點ナリサレハ當初被上告者カ
五百圓ト他ニ一ノ七百九十五圓七拾五錢ノ預リ證トノミ落手シ貳千圓ノ證書ヲ上告者
ニ渡セシモノト決定セハ實ニ其同一ノ金額ト同一ノ證書ト引換ユヘキハ當然ニ付五百

圓ノ金額ト他ノ七百九拾五圓七拾五錢ノ證書トナ上告者へ渡スニ於テハ四通ノ證書ヲ返却セサラントスルモ得ヘケンヤ之ニ反シ五百圓ノ證書四通ヲ渡シ二千圓ノ金額ヲ落手セシモノト決定セハ五百圓金ヲ返却セシニ於テハ夫レニ相當スル五百圓ノ證書一通ト引換ヘキモノニシテ四通トハ引換得ヘカラサルノ理ハ明ラカナルヘシ故ニ當初ノ取引ヲ決定スルハ緊要ナリト云フナリ然ルニ原裁判所ハ只漠然被上告者ノ申立ヲ採用シ其第四號證ヲ解釋判定セシノミナレハ此事實ハ審理ヲ盡サ、ル不法ノ裁判タルヲ明ラカナリ

一 被上告者カ原裁判所へ呈シタル一號ヨリ四號迄ノ證據ハ如何ナル効力アリテ二千圓落手セシテ貳千圓ノ證書ヲ渡セシモノナリト決定シ得ヘキモノナルヤ一モ其事實ヲ見ルヘキモノナシ其一號証ハ何カ差引勘定ノ如キモノヲ記スルモ被上告人カ勝手ニ周旋人ト名ケ更ニ四通ノ證書ニモ關係ナキ他人ノ證明ナレハ固ヨリ取ルニ足ラサルモノナリサレハ前ニ拔記セシ判文ハ全ク被上告者カ無證ノ陳述ヲ採用セシモノナルヲ明ラカナリ

一 上告者ハ如何ナル證書アリト吟味スルニ公證ヲ經タル所謂公正ノ證書四通合金額貳千圓ノ證書アリサレハ此有證ニ對シテハ特ニ此金額ハ落手セサルニ證書ノミ渡セシモノナリトノ證據アラサル限リハ貳千圓ノ借金ヲ表示シテ其有効ナルヘキ證據タル勿論ナリ然ルニ原裁判所カ何ノ辯明モナク知ラヌ類ニ之ヲ排斥シテ願ミサルハ何事ソヤ誠ニ有證ノ辨論ヲ採ラスシテ無證ノ陳述ヲ採用セシ不法ノ裁判ナルヘキハ明ラカナリ

一 被上告者ハ控訴狀ニ明治十五年四月十二日金五百圓ノ證書四通ヲ渡シ現金ハ五百圓受取タリト申立タリ然ルニ此事ニ付殘千五百圓ノ如何ハ更ニ何ノ理由モナク只渡サ、リシニ由リ受取ラサリシト云フカ如シ果シテ然ラハ何故ニ即日若クハ次日之ヲ其筋へ出訴セサリシヤ而シテ其精算ノ物解ヲ出願セシハ七月廿六日ナリト又控訴狀ニ記シタリ其日ヲ經ル百餘日ニシテ而カモ不動産ヲ抵當ニ金圓急用アリテ借入ル、身分ノ事實如此理由アルヘキ筈ナキナリ

一 被上告者ハ控訴狀ニ又記シテ曰シ「無斷ニ引落シ殘金七百九拾五圓七拾五錢ノ証書ヲ渡シタルニ由リ之ヲ受取同月(四月)廿六日受取約ヲナセシ」云々ト是レ甚ダ解シ難シ被上告ノ云カ如ク貳千圓ノ内數多ノ金ヲ引去ラル、ニ於テハ其何ノ爲メニ引去ラル、ヤ其際ニ於テハ精算書ヲ落手スヘキハ理ノ正ニ然ルヘキモノナリ然ルニ被上告者ハ殘金預書ハ四月廿六日受取リノ約ヲナセシト明言シ而カモ其期限ヲ過キ百日ノ後ニ於テ始メテ物解へ出願シタルハ抑モ何事ソヤ

一 被上告者ハ又控訴狀ニ現金五百圓ノミアラサリシニ付之ヲ落手シ貳千圓ノ證書ヲ渡シタルナリト云リ是甚ダ解シカタク何トナレハ金貳千圓ヲ壹通ノ證書ニ認メ込ミタルモノトセハ或ハ一理ナキニアラス(然ルモ殘金返書ハ勿論取置クヘキナリ)然レ共幸ニ本件ハ五百圓宛四通ノ證書ナレハ其際被上告者ハ何故ニ壹通ノミヲ渡サ、リシカ實ニ怪シムヘキ也

辨明

右上告ノ要旨左ノ二點ニアリトス

一 原裁判所カ被上告人無證ノ陳述ヲ採用セシハ不法ナリトノ
一 原裁判所カ事實ノ如何ヲ審究セス被上告第四號證ノ解釋ニ據リ判決ヲ與ヘタルハ審理不盡ナリトノ

一 原裁判所ハ被上告人ノ呈出スル證據ト其申立ヲ參照シテ事實ノ認定ヲ下シタルモノナレハ單ニ其申立ノミチ區分シテ之ヲ採用セシハ不法ト論スルヲ得ス
一 本件ノ事實ハ兩造ノ申立符合セサルヲ以テ固ヨリ其申立ノミチ依リ之ヲ判定シ難シ故ニ兩造ノ呈スル證據ニ依リ其申立ノ適否ヲ定ムルハ當然ナリ而シテ上告人ハ甲號証ヲ以テ自ラ主張スル處ノ事實ハ適當ナリト云フモ被上告人ノ申立ル事實ト其呈スル證據ニ就テ視ルモ毫モ不適當ノ廉アラス此場合ニ於テ被上告第四號證但書ノ消滅セサル限りハ之ヲ四通ノ證書ト交換スヘキモノト看做サ、ルヲ得ス依テ原裁判ハ至當ニシテ審理不盡ノ廉ナシトス

判決

前辨明ノ如シナルニ依リ原裁判ハ破毀セサルモノナリ
第百卅四號

○地券書換拒障一件上告ノ判文明治十五年十二月廿七日上告
明治十七年三月十七日申渡

熊本縣肥後國山鹿郡下内田
村士族

上告人

原 口 五 一 郎

東京府麴町區有樂町三丁目
一番地

右代言人

齋 藤 孝 治

熊本縣肥後國山鹿郡下内田
村平民

被上告人

原 口 要 蹊

外 廿 三 名

地券書換拒反對ト題スル一件熊本始審裁判所ノ終審裁判ヲ不法トシ破毀ヲ要ムル上告ノ要領左ノ如シ

第一條

抑明治維新ノ以前ニ在リテハ普天ノ下皆之レ王土ニシテ人民ノ所有地トテハ決シテアルコトナシ然ルニ地券御下附ノ際ニ至リテ初メテ其以前ヨリ土地ヲ耕作シ又ハ耕作セシメテ正租ヲ藩主又ハ知行主ニ納メ來リシ者ニ其所有權ヲ得セシメタルモノナレハ維新以前ニ土地ノ賣買トハ原裁判所カ判決ノ未段ニモ示サレタルカ如ク其實現地ヲ販賣讓與スルニ非ラスシテ單ニ己レカ受持ニ屬シタル小作權ノ讓渡ヲ爲ス者ナルコトハ原裁判所ノ認定ナキモ戸長カ申出ナキモ業ニ已ニ定マリタル理由ナリトス然ルニ原裁判所ハ上告者ニ於テ論地ハ今去ル百六十九年ノ以前竹内家ニ於テ論地ヲ知行スルノ權ヲ召上ケラレタル

節更ニ上告者ニ於テ其以前ヨリ耕作主タルノ事由ヲ藩廳ニ申出テ、爾來ハ論地ノ正租ヲ竹内家ニ納メヌシテ御郡間ニ上納セシトノ申立ヲ誤リテ（假令一個人民カ何等ノ事情ヲ歎願スレハ逆藩廳カ之レヲ聽許スヘキモノニ非ラス）トノ判定ヲ降サレタルハ必竟原裁判所ハ上告者ニ於テ此當時論地ノ所有權ヲ得タシト藩廳ニ申立タルモノト誤認セシモノト謂ハサルヲ得ス

又原裁判所ハ竹内家ニ於テ赦免開キノ地ヲ藩廳ニ召上ケラレタル時ハ該地ノ所有地ヲ没収シテ之レヨリ藩有地トナリシモノ、如ク（看ヨ藩廳カ之レヲ聽許セカリシコ因リ現ニ寶曆度見圖帳ニ於テモ御郡間上リ開キノ六字ヲ明記シアルニ非ラスヤ）ト判決セラレシモ前段ニ述ルカ如ク舊藩本藩ノ領地内ハ假令其藩士ニ知行セシノナル、ノ地ト雖只タ其所有得テ知行セシムルコ止マリテ其地ノ所有權ヲ與フルニ非ラス實ニ其所有權ハ熊本藩主ニ在ツテ存スルモノナレハ論地ノ如キモ亦竹内家ニ於テ其知行ヲ召上ケラレタルモ只タ其所得ヲ召上ケラレタル迄ニシテ竹内家ニ上納シ來リシ正租ハ是レヨリ御郡間ニ上納スヘキニ至リシナリ故ニ御赦免開キト名稱セシ地所モ御郡間上リ開キト名稱ヲ改メタルハ敢テ藩有ナルノ故ニ非ラスシテ其正租ヲ收ムヘキ衙門ヲ名稱セシハ論地ノ來歴ヲ陳述セシ中ニ於テ申述ヘタルカ如ク然リ然ルニ原裁判所ハ之レ等ノ事由ニ就テ毫モ審理セラレサリシハ不法モ亦甚シカラスヤ

第二條

上告者先代カ壽七外二名ノ上地證文ニ庄屋ノ名義ヲ以テ奥印セシハ只タ壽七外二名ニ於

テ上告者ノ地ヲ永小作スルノ權ヲ他ニ讓渡スニ就テ之レニ名受人即チ所有者ノ故ヲ以テ奥印シタルニ過キサルコトハ獨リ此壽七外二名ニ止マルニ非ラズ甲第十號證ノ如ク比類甚タ多シ又獨リ本訴ノ論地ノミナラス永小作根直シノ上地證文ニモ村庄屋ノ證印アルコトハ甲第三十五號證ノ如ク國武藤内ノ名受ケ地所ヲ其永小作人ニ於テ小作根直ヲ爲シタルモ地所ノ賣買ニ非ラサルノ比例アリ又實ニ永小作人ニ其地ノ所有權アリトセハ嘗テ被上告人等ト同シク上告人ノ名据アリシ御郡間上リ開ノ地ヲ同村ノ久助ニ於テ小作セシ地所モ同人ニ於テ安政五年中自己ノ名受ケアル地ヲ糶賣ニ附シタルモ彼ノ小作地モ亦糶賣ニ附スヘキナリト雖モ素ヨリ小作ヲ爲スヘキノ權利ノミナレハ該地ハ只タ上告者ノ先代ニ上地ニ過キサリシコトハ甲第二十號証ノ如ク久助所有地入札拂根帳ニ御郡間上リ開ノ地所ナキコト甲第二十一號證ノ如ク久助ヨリ小作地ヲ返還シタルニ就テ見ルモ知ルヘキ也又眞弓勝三郎ニ宛タル乙第九號證ノミハ正租ヲ取立タルコト非ス又實ニ上告者ニ於テ正租ヲ取立ツヘキノ謂レナキコトハ若シ該証ニ記スル金二錢二厘ヲ以テ正租トセハ同人ニ小作セシメタル山地ノ正租金二厘ヨリモ甚タ多キニ過クルヲ以テモ知ルヘシ然ルニ原裁判所ハ原告先代カ庄屋ノ名義ヲ以テ壽七外二名ノ上地證文等ニ奥印シ或ハ原告カ山稅トシテ眞弓勝三郎ヨリ金員ヲ徵收セシ云々ト證書ノ誤解ヲ列記シテ論地ノ名据ハ只タ共有者總代ノ故ヲ以テナリトノ判決ヲ降サレタルハ不法ト云ハスシテ何ソヤ

第三條

竹内家ノ上リ地中ニ於テ當時ニ至リ一ツハ官有地トナリ一ツハ上告者ノ所有ニ歸セシ事

ハ其官有地タルモノハ悉ク上リ敷ト稱シタル地ノミニシテ實ニ上リ敷ノ地ハ維新以前ヨリ御山支配役ナルモノニ於テ支配シテ人民ハ只ダ之レヲ預リシニ過キカリシコトハ甲第三十三號證甲第十四號證甲第十九號證甲第二十九號證甲第三十號證甲第三十一號證甲第三十二號證ノ如シ又甲第十六號證甲第十七號證ノ比例ノ如シ又同シク竹内家ノ上リ開キ地ニシテ上告者ノ所有ニ歸シタルハ甲第一號證乃至甲第十號證ノ如ク往古ヨリ上告者ノ名據アルニ就キ見ルモノツハ以テ官有地トナリ一ツハ以テ上告者ノ所有ニ歸スルモ敢テ異ムニ足ラス然ルニ原裁判所ハ夫レ之レ等ニハ毫モ審理ヲ盡サスシテ裁判セラタルハ誠ニ不法トヤ云フヘキナリ

第四條

原裁判所ハ太田村外三ヶ村ノ類例ヲ引証セラレタリト雖モ太田村ハ甲第二十七號證ノ如ク大木兼記カ一名持ノ地ニシテ同人ヨリ明治十四年十一月中有働真平外三十二名ニ賣却シタルノ證據アリ決シテ數人共有ノ地ニシテ一名ノ名據アル地ニハ非ラサルナリ又蒲生村ノ御郡問上リ開キ地ハ其名據人ハ善次郎一人持ナルコトハ乙第十二號證ノ如クニシテ該地ハ嘉永二年間ニ同人ノ子孫ヨリ藤助外五人ニ賣却セシコトハ乙第十二號證附録ノ如ク又日置村ハ甲第十九號證ノ如ク一村上リ開地即チ御郡問上リ開地ハ藤左衛門ノ名據アリテ當時モ尙ホ他ニ賣却シタルノ地ヲ除クノ外ハ同人ノ子孫ニ於テ號外第七號證ノ如ク所有セリ又相良村ノ地ハ乙第十四號證ノ如ク上リ開地ニ非ラスシテ劫野開キ地タルカ故ニ比例スヘキモノニ非ラス然ルニ原裁判所ハ太田村外三ヶ村ノ見圖帳名據ノ類例云々トノ御

判決ハ何等ノ類例ナルヤ決シテ仍ル所ロナキニハ非ラサルヘシト雖モ上告者ハ其何ノ類例ナルヤ知ル可カラズ

第五條

原裁判所ハ戸長山崎次郎ノ証言ヲ其判決文中ニ記載セラレタリト雖此証人ノ審問アリシ際ハ上告人ヲ審廷ニ出サシメス只タ被上告者ト此証人トノミヲ審問セラレタルノ不法アルノミナラス實際戸長山崎次郎トノ問答ハ又決シテ該記載ノ如ク細密ナルノ事項アラサルコトハ原裁判所ノ書類中ニ就テ見ルモ明カナリ良シ其問答アリトスルモ元來戸長ナルモノハ其探ル所ノ職權ニ仍リテ採リ行ヒシ事實ヲ証スルコト就テハ充分ノ効力アリト雖モ上リ開地ノ性質及論地ノ來歴ニ就テハ戸長ハ之レヲ知ルヘキノ義務ナク又從ツテ之レ等ノ証言ハ證據ノ効力ナシ故ニ山崎次郎ノ証言ハ事實トスルモ尙ホ且證據ノ効力ナシテ只タ證據ノ端緒ニ過キス況ンヤ山崎次郎ニ於テハ實際ノ事實ヲ知ルヘキノ謂レナキニ於テオヤ其故如何トナレハ山崎次郎ハ下内田村ヲ去ル一里有餘ヲ隔テタル石淵村ニ住シテ其齡ハ本年甫メテ三十六歳ナレハ今ヲ去ル百七十年前ヨリノ事實ヲ悉ク知ルヘキノ道理ナシ故ニ山崎次郎カ答フル所ノ事柄ハ其仍ル所ロナキノ答辨ニシテ凡テ架空ノ陳述ニ非ラサルハナク只タ裁判官カ問フ所ノ旨趣ニ違ハサル答辨ヲ爲シタルモノナルヘシト雖モ原裁判所ハ用テ之ヲ證據トナシ此證據ニ仍リテ甲第一號證乃至三十五號證ニ至ル迄ノ確カナル證據ヲ悉ク消滅ニ歸セシメ實ニ上告者祖先以來持チ傳ヘシ論地ノ所有權ヲ失ハシメシニ至リシトハ實ニ不法ノ裁判ト云ハスシテ何ソヤ

明治十四年第八十三號布告ヲ以テ治安裁判所及ヒ始審裁判所ノ權限ヲ制定セラレタリ而シテ其第二條ニ治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ストアリ又同第五條ニ始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ爲ストアリ今本訴ハ上告人ニ於テ初メ被上告人等ヨリ治安廳ニ起訴セラレタル節ハ九件ナリシナリ故ニ治安裁判所ノ裁判モ九通同文ノ裁判申渡サレタリ上告人ハ九件トシテ始審廳ニ控訴セシモ原裁判所ハ必竟便宜ニ仍ラレシモハ相違ナカルヘント雖モ別ニ本訴兩造ヨリ其請願アリシモ非ラサルニ九件ト一件トシテ裁判ヲ與ヘラレタルカ故ニ遂ニ權限ニ越ヘタルノ裁判ヲ與ヘラル、ニ至リシナリ何ントナレハ本件ハ甲第五號証ノ地券臺帳ニ仍リ所争ノ地所地價金ノミニテモ合計金百八圓九十四錢七厘トナルカ故ナリ故ニ原裁判所ハ越權ノ所分アリシモノト云ハサルヲ得ス

前條ノ理由ナルヲ以テ原裁判ヲ破毀セラレシコトヲ請願ス

辨明

原書類ヲ閱スルコト上告者カ原裁判所へ差出シタル控訴狀及ヒ追伸書等ニ論地ハ先代喜兵衛カ竹内吉兵衛ヨリ買受居タルヲ以テ該地沒收ノ後舊熊本藩へ上願シ喜兵衛所有地ニ確定セシ旨續々辨論シアレ共其竹内吉兵衛ヨリ買受ケ又ハ藩廳ニ上願シ許可ヲ受ケタル証憑アルコトヲ抑上告者カ原裁判所へ差出タル証據中抗辨ノ根據トスル處ノモノハ甲第一

二三號甲第六七號証上告者先代ノ名據及ヒ甲第九號甲第二十一號証ニ在リト雖モ舊熊本藩ニ於テ御郡間上リ開ト稱スル地所ハ赦免地ノ沒收ニ係レルモノナルヲ以テ其上リ開ノ名稱アル地所ニシテ人民ニ私有權ノアルヘキ道理ナシ如何トナレハ論地ノ性質タル元來士分ニ限リ赦免開ヲ差許サレ一旦罪アリテ其地ヲ沒收セラレ、モ其子孫ニ於テ再士籍ニ被召出ル、時ハ赦免開ノ地如元返シ被下ル、トノ藩廳例規ノアル趣ナレハ也而シテ論地ハ御郡間上リ開ノ名稱依然トシテ存セルコト甲第一二三號甲第六七號証公簿上ニ著ルシク且甲第二十一號証ニ上リ開ノ明文アリ又被上告第九號証ニ「竹之内上リ開山稅」トアリ又被上告第十號証上地証文ニ「御郡間上リ開ト記載セル而已ナラス上告者先代カ庄屋ノ名義ヲ以テ公証ヲ爲シタル形跡アリ若シ上告者先代カ舊熊本藩ノ許可ヲ得テ論地ノ所有主トナリシニ於テハ右等上リ開ノ名稱ヲ掲ケ又ハ上告者先代カ地主ノ名義ヲ用ヒスシテ庄屋ノ名義ヲ用ユルノ理アランヤ其甲第九號証アルモ上告者自己ノ調製或ハ他人ノ保証ニ係リ都テ被上告者ノ認メタルモノニアラス依是觀之ハ甲第一二三號甲第六七號及ヒ甲第九號甲第二十一號証ハ上告者先代カ論地ノ所有主トナリシ証據ニ相立難ク從テ該地券名受ケノ無原由ニ歸スヘキモノナルヤ亦明ラカナリトス」上告者於テ原裁判所カ其判文ニ「長山崎次郎ノ陳述ヲ掲載セシト及ヒ本訴九件ヲ合併裁判セシ點ニ就キ云々所論アリト雖モ原裁判所於テ次郎カ陳述セサリシ事項ヲ掲グルノ道理ナキ而已ナラス是ヲ被上告乙第廿八號証即チ次郎外三名ノ保証書ニ照合スルニ本件緊要ノ點ニ關スル申立ニ至テハ其異ナル所アルヲ見ズ殊ニ原裁判所ハ右陳述而已ニ據リタルニアラス舊熊本藩ノ例規及ヒ他ノ

証據等ヲ參酌セシメハ其判文ニ因ツテ明カナリトス又其九件合併裁判シタルハ畢竟事件
同様ナルヲ以テ便宜ニ依リシモノニテ越權ヲ以テ可論モノニ非レハ右等破毀ヲ要ムルノ
材料ト爲スヲ得ス

右ノ理由ナルヲ以テ原裁判所カ上告者ノ抗辨ヲ排斥シ結局（原告ノ請求不相立到底始審
裁判ノ通心得ヘシ）ト申渡シタルハ相當ノ裁判ナリトス

但緊要ノ點ニ對シ辨明ヲ與ヘ他ハ一々辨明セス又號外証ヲ舉ケ所論アルモ原裁判以後
ニ係レル証據モノナルヲ以テ是亦辨明ヲ與フルノ限リニアラス

判決

右辨明ノ如クナルヲ以テ熊本始審裁判所カ本訴ニ對シ申渡シタル終審裁判ハ破毀スヘキ理
由ナキモノトス

第百卅五號

○當坐貸越金催促ノ一件上告ノ判文明治十六年七月十一日上告
明治十七年三月十七日申渡

兵庫縣攝津國神戸區兵庫南
逆瀬川町平民

上告人 岩田正吉

石代言人 府下日本橋區小網町四丁目
二番地 大原鎌三郎

大坂府西區江戸堀下通壹丁
目五十三番地第百廿六國立
銀行跡引請人

被上告人 猪飼九兵衛

當座貸越金催促ノ一件大坂控訴裁判所ノ裁判ヲ不當ナリトシ破毀ヲ求ムル上告ノ要旨左ノ
如シ

第一條

原判文ニ原告ニ於テ第三號其他ノ證書ヲ呈シテ被告ノ請求金高ハ未タ精算ヲ經ス從テ過
當ナリト申立レ其第一號証ヲ觀ルニ現ニ右請求金ノ金額ヲ記載シ之レアリ果シテ未タ
精算ヲ經サル過當ノ金額ナレハ原告ニ於テ甘シテ該証ヲ請取置ヘキ理由ナク其黙シテ
之ヲ受取リシハ即チ原告ニ於テ其精算ヲ經テ適當ナルヲ認メタルナリト以上ハ原裁判
ノ文ヲ約シテ其意ヲ撮取シタル處ニ係ル今ヤ其尤モ不當ナル所以ヲ辨センニ第一原裁判
所カ上告第一號証中金壹万貳千六百七拾圓九拾貳錢八厘也ト記載シタル部分ノミニ着眼
シテ論ヲ立テラレシハ上告人ニ於テ不當ナリト斷言セサルヲ得ス何者該証ノ末尾ヲ看
現ニ（貸與金壹万貳千六百七拾圓九拾貳錢八厘ト有之候得共双方立會計算ノ上若シ違算
有之ルハ）云々トノ明文アルニ非スヤ茲ニ依テ是ヲ觀レハ被上告ニ於テ既ニ精算ヲ爲シ
アリト云モ其未タ然ラサルハ勿論被上告モ其金高ノ確定ナラサルヲ認メタルヲ今更論ス
ルニ及ハス原裁判所ハ該証ノ初項ヲ視シモ其末項ノ文ハ終ニ眼界ニ入ラサリシ乎審理不

盡モ亦甚シカラスヤ第二原裁判所ハ上告第三號証ノ上告人カ手裡ニ在ル一義ニ付毫モ辨明ヲ與フルナシ此レ亦極メテ審理不盡ト云ハサルヘカラス凡ソ証書ヲ反古ト爲サンコハ或ハ之ヲ取戻スカ若クハ其印影ヲ消却スルカ又ハ返証ヲ取ルカ必ス其一法ニ由ラサルヘカラス今上告第三號ハ依然上告人ノ手裡ニ在リ未タ取戻サ、ルナリ其印影完全タリ未ダ消却セサルナリ然ラハ則チ其返証アル歟被上告之ヲ擧ケス擧ケサルニ非ズ擧ル能ハサルナリ何者上告人ハ未ダ曾テ返証ヲ交付シタルヲアラサレハナリ玆ニ依テ之ヲ觀レハ上告第三號証ハ未ダ反古タラス則チ原被ノ間未ダ精算ヲ遂ケサルナリ原裁判所カ此點ニ關シテ何等ノ裁判ヲ與ヘラレサルハ不當ナリトノ

第二條

被上告ハ果シテ上告第二號証ノ金額ヲ辨償スルノ義務ナシト云フ平原裁判所ハ單ニ該証ノ銀行條例ニ合ハサルヲ執テ其義務ナシト裁判セラレタルモ被上告第四號証ニ據レハ其實被上告者カ其雇人ナシテ該金員ヲ借り入レシメ以テ其利ヲ享有セシメ疑ヲ容レヌ既ニ之レヲ借り入レシメ又其利ヲ享有セシメ上ハ該証ノ法式ニ合ハサルニ拘ハラス被上告ニ於テ之レカ辨償ヲ爲スノ義務アルヲ當然ナリ尤モ被上告第四號証中該金員ノ償却ニ關シ種々ノ議アリト雖モ必竟無証ノ陳述ニ止マルヲ以テ原裁判所ハ須ラク此一項ニ關シテモ原被ナシテ各其帳簿ニ據リ立會精算ヲ爲サシメサルヘカラス而ルニ終ニ事此ニ出ス被上告カ該金員ヲ使用シタルノ証跡アルニモ拘ハラス單ニ其法式ニ合ハサルノ故ヲ以テ被上告ノ關知スルニ及ハサルモノトセラレタルハ不當ナリトノ

辨明

本訴ノ要點ハ上告第一號証ニ掲ル壹万貳千六百七拾圓九拾貳錢八厘ハ上告人ニ於テ被上告銀行ヨリ借り入レタル金額ニ相違ナシト雖モ右金圓ノ内ハ上告第二號第三號証ノ合金七千圓入金シタルヲ以テ上告第一號証ノ契約ニ基キ差引計算ヲ求ムト云ニ在リ仍テ之ヲ審案スルニ被上告銀行ニ於テ從來原被ノ間ニ取引シタル金圓ノ差引計算ヲ爲シ上告第一號証ノ如ク其總額ヲ壹万貳千六百七拾圓九拾貳錢八厘トシ之レヲ上告人ニ送りタル際若シ七千圓ニモ及フ巨額ノ違算アリトセハ上告人ニ於テ何等ノ故障ナシ該証書ヲ落手スル謂レナシ且上告第一號証ニ(壹万貳千六百七拾圓九拾貳錢八厘ト有之候得ル双方立合計算云々)トアルハ些少ノ違算ナキヲ保シ難キヲ以テ立合調査スヘシトノ趣旨ニシテ當時七千圓ニモ及フ巨額ノ違算ナキハ上告人ニ於テ知了セシ者ト云ハサルヲ得ス何トナレハ右証書ノ文中ニ(本月九日三千圓御入金可相成御約定)中若シ違算有之右金額ヨリ超過スルハ右三千圓ノ外ニ御入金可被成若又減額スルハ右三千圓ノ内其割合ニテ御入金云々)トアリ右文意ヲ解釋スレハ上告人ニ於テ壹万貳千六百七拾圓餘ノ借財ニ對シ内入金三千圓返却スルノ約定ナシ若シ元金ニ違算アリテ之ニ超過スルハ右三千圓ノ外ニ右超過ノ金員ヲモ加ヘテ之ヲ返却シ若シ減額スルハ右三千圓ノ内ニテ減額ノ金員ヲ引去リ其殘額ヲ内入金ト爲スノ契約ナレハ當時未確定ノ金員ハ僅少ナリシヲ推知シ得ヘケレハナリ以上ノ事實ニ就テ看レハ上告第二三號証ハ其實効力ナキ者ニシテ七千圓ノ違算アリト認メカマシ況ンヤ上告第二號証ノ金員ハ銀行帳簿ニモ記載ナシ且杉谷萬三郎ノ私印

ヲ押捺アリテ銀行條例ニ背反スル証書ナリ且杉谷萬三郎ノ陳述書即チ被上告第四號証ニ依テ看レハ該金員チ杉谷萬三郎ヨリ被上告銀行ニ差出シ同銀行ニ於テ使用セシ者ノ如シト雖モ同証書中ニ既ニ計算相濟タル旨記載アリテ前條辨明ノ事實ニ適合セリ又上告第三號証ノ儀ハ(差引勘定相濟候上ハ此証可爲反古)トアリテ取テ返還ヲ求ムヘキ証書ニ非レハ今尙上告人ノ手裏ニ存在スルモ怪シムニ足ラサルナリ仍テ原裁判所カ結局當坐貸越金高ハ壹萬貳千六百七拾圓九拾貳錢八厘ナルヲテ原告^上告ニ於テ確認シタルモノ云々ト判定シタルハ不當ノ裁判ニアラストス

判決

前條辨明ノ理由ナルヲ以テ大坂控訴裁判所ノ裁判ハ破毀スヘキモノニアラストス
第百卅六號

○質地受戻事件上告ノ判文明治十六年七月三十日上告
明治十七年三月十七日申渡

埼玉縣武藏國入間郡南畑新
田五十五番地平民

上告人

關 根 幸 七

東京府京橋區銀座二丁目九

番地寄留神奈川縣平民

右代言人

太 田 英 壽

埼玉縣武藏國入間郡南畑新田

四十番地平民

被上告人

當 麻 磯 七

本件ハ上告人ノ記訴ニシテ慶應二年寅十二月付質地証書面^甲第二號ノ田地九反三畝二十三歩ヲ受戻シトノ訴訟ニシテ始審終審共起訴者取訴ニ歸セシナ今又上告ニ及フモノナリ其要領左ノ如シ

第一條

本訴ハ明治七年以降ニ於テ甲第四號証ノ地所ト甲第二號証ノ地所ト併テ被上告人ノ所有ニ歸セシメタルモノナリヤ又ハ今般受戻ヲ求ムル甲第二號証ノ地所ハ未タ所有權ヲ移サ、ルモノナリヤノ争ヒ也然ルニ被上告人カ所有權ヲ得タル証據ト爲ス乙第二號証ニ「質流地表面ニ認メ年限有之候裏書相闕キ爲趣意金百兩」云々トアルハ甲第四號証ノ五反五歩ノ地所ヲ指シタルモノニテ甲第二號証即本訴ニ求ムル地所ヲ指シタルモノニ非ス如何トナレハ甲第二號証ニハ乙第二號証ニ謂フ所ノ裏書ナルモノナケレハナリ
又甲第二號ノ地所ハ慶應二年十二月ヨリ明治八年十二月迄ノ期限ナリ然ルニ乙第二號ヲ授受セシ明治十一年十一月ニ在リテハ甲第二號証ヲ見當ラサル旨原裁判所ニ於テ被上告人ノ申立アリ左スレハ被上告人ハ甲第二號証ノ期限並ニ裏書ノ有無ハ知ラサル者ナリ
若シ乙第二號証ノ裏書ノ文字ハ甲第二號証ニモ推シ及ホスヘキモノナリセハ被上告人ハ上告人ヲ詐偽シテ乙第二號ト甲第三號^{明治二年}十一月附ヲ取リタルヲ推知セラルヘシ然ルヲ原裁判所ノ審理茲ニ出テス乙第二號及甲第三號ヲ純然タル契約ト誤認セシトノ事

乙第二號証ニハ水腐違作ニ付証人相立裏欠ノ趣意金トシテ金百圓受領シタルノ明文アレトモ甲第三號及乙第三號ノ質地証ニハ所有權ヲ移スノ契約アラズ原裁判所ハ金百圓ヲ派金ト看做サレタレトモ右ハ誤解ナリ

又此質地ハ被上告人ニ利益アルヲ以テ上告人ノ受戻サ、ラン事ヲ希望シ時々金圓ヲ貸與セシニ過キス然ルテ明治二年ヨリ五ヶ年ヲ經過スル以上受戻ノ權ナシト判決アリシハ不當ナリトノ事

判決

原裁判所ニ於テ上告人ノ求ムル甲第二號証九反三畝二十三歩ノ地所ハ論外ナル五反五歩ノ地所ト共ニ百圓ノ趣意金ニテ明治十一年十一月中乙第二號証ヲ以テ全ク被上告人ノ所有トナリシモノト認定シタリ上告人之ヲ非難シ甲第二號証ニハ裏書ナキヲ以テ乙第二號証ニ關セスト云ヘリ左レトモ其乙第二號証ニ「慶應二寅年其後兩度ニ云々金子二百四十五兩質地ニ相渡シ」云々トアルハ即本訴ノ地所ト今一ト藤ノ地所ト兼テタル事實ニ適合スルヲ以テ原裁判所ノ認定ハ至當ナリトス其他上告狀ニ謂フ所ノ若シニ藤ノ地所ヲ兼テタルモノナラハ被上告人ノ詐偽ナリトノ事及ヒ金百圓ヲ派金ト看做セシハ不當ナリ等ノ申立ハ共ニ上告ノ理由ト爲スニ足ラス依テ原裁判ハ破毀セサルモノナリ

第百卅七號

○貸金催促一件上告ノ判文明治十六年九月六日上告
全十七年三月廿二日申渡

上告者

富山縣越中國上新川郡滑川
大町千七百五十七番地平民
桐澤九八

右代言人

東京府麴町區有樂町三丁目
一番地平民
齋藤孝治

富山縣越中國上新川郡下小
泉村三百一番地平民神保尙
吉總理代人右尙吉實母

被上告者

神保シゲ

上告ノ要領

第一 原裁判所ハ被上告者ヨリ提供スル申號証ノ金額九拾圓ハ上告者ヨリ提供スル乙第一號証ノ金額五拾七圓ヲ更改セシモノト推測セラレタリト雖モ決シテ然ラス其故タル乙第一號証ハ明治十四年一月十四日ノ成立ニシテ抵當ヲ附シタル借用証書ナリ而シテ該証ニ對スル借用金五拾七圓ト其利子トハ明治十四年五月十五日ニ皆済シ公証ヲモ取消シタルコトハ乙第一號証ノ如シ然ルニ殆ント五ヶ月ヲ經過ノ後又々上告者ニ金圓ノ入用アルカ爲メ尙ホ家屋ヲ抵當トナスコトニ定メ明治十五年十月四日甲號ノ証書ヲ記シ戸長ノ公証ヲ經テ之ヲ被上告者ニ渡シタレト被上告者ハ右ノ金圓ヲ渡サスシテ明治十五年十月廿日乙

二號証ノ如キ端書ヲ以テ精算書ト唱ヘテ交付シタリ然レハ再ヒ五十七圓ノ元利ヲ返償ス
 ヘキ謂ハレナキカ故ニ其懸合ナナセト巧言ヲ以テ時日ヲ送ル中ニ被上告者ハ當時ノ場所
 ニ轉寓スル等ノ事アリテ甲號証ノ金額ヲ受授セサリシナリ然レハ其儘等閑ニ付シ去ルヘ
 キニ非ラサレハ嚴シク証書取戻シノ懸合ヲナス中ニ忽然被上告者ヨリ貸金催促ノ訴ヲ起
 サレタル次第ナリ右ノ事實ナルカ故ニ甲號証ハ決シテ第一號証ヲ更改シタルニ非スト云
 ノ証ハ第一乙第一號証ノ金額ヲ返償シタルハ明治十四年五月十五日ニシテ甲號証ノ成立
 ハ明治十五年十月四日ナレハ此間殆ンド五ヶ月餘ノ時日ヲ經過セリ此時間ノ經過ハ乙第
 一號証ヨリ甲號証ヲ更改シタリト云フノ間ニハ甚タ事實ニ適セサル長キ時間ノ經過ト云
 ハサルヲ得ス第二果シテ甲號証ハ乙第一號証ヲ更改シタルモノニシテ乙第二號証ハ其精
 算書ナリトセハ先ツ精算書ヲ造ルノ後ニ更改スヘキノ證書金額ヲ算セサル可ラス又其更
 改スヘキノ金額ヲ知ルヘカラス然ルニ乙第二號証ハ十四年十月二十日付ニシテ甲號証書
 ノ成立ヨリ後ル、十五日間ナリ第三又乙第二號証ノ計算相當セズ加之証文債又証文料
 ト唱ヘテ同種ノモノ各拾五錢ツ、ノ記載アリ又全ク上告者ニ於テ借り入レタルナキ金
 拾五圓ノ記入等アリテ差引殘額合計九十圓ナリト云フモノ、如シト雖モ如何ナル算法ニ
 據ルモ決シテ九十圓ノ金額ヲ得ヘキノ非ラス然ルニ被上告者ハ如此曖昧ノ精算書ニ依リ
 テ甲號証書更改シタルノ理由ヲ記シテ上告者ニ與ヘタリトノ申立ハ畢竟被上告者ニ於テ
 一ト度五十七圓ヲ貸與シタルノ事ヲ奇貨ト爲スモノト云ハサルヲ得ス然ルニ原裁判所ニ
 於テハ此甚ク賭易キノ證據ヲ措キ不當ノ裁判ヲ與ヘラレタル原因ハ上告者ヨリ被上告者

～甲號証ヲ交附シタル明治十四年十月ヨリ上告者ニ於テ乙第一二號証ヲ用テ甲號証書ハ
 虛構ノ証書ナレハ取戻シタリト勸解ヲ出願セシ明治十五年七月迄ノ時間ヲ空過セシニ
 仍ルモノニシテ裁判言渡狀中ニモ(原告ハ公証ノ証書差入置ナガラ九ヶ月餘ノ久シキ九
 十圓ノ金額ヲ受取ラスシテ黙過スルノ理由ナキノミナラス)云々トアリ然レハ此時間ヲ
 經過セシハ蓋シ故アリ這ハ始審應以來詳細ニ申述タル如ク初メ甲號証ニ公証ヲ受クル際
 ハ被上告者ノ實父吉右衛門ト同道戸長役場ヘ到リテ公証ヲ受ケ即時該証ハ吉右衛門ニ於
 テ受取タレハ金圓ハ自宅ニ於テ交付スヘシトノ事ニテ同伴シタレハ當日ハ金調モ行届カ
 サレハトテ翌日ヲ約シテ歸宅シ爾來數度ノ催促ニ及ンテ結局其月ノ二十日ニ乙第二號証
 ナ上告者ニ渡シタリ然レハ前顯ニ述フルカ如ク乙第二號証ハ甚タ曖昧ナルノミナラス五
 十七圓ノ金額ハ既ニ返償シタルモノナレハ其掛合ヲ爲スニ或ハ未タ帳簿ヲ抹殺セサレハ
 誤リヲ來シタル等ノ口實ヲ以テ時日ヲ遷延シタル中ニ被上告者ハ當時ノ住所ニ轉寓シタ
 ル等ノ事柄ヨリ大ニ時日ヲ經過セリ決シテ一度拂ヒ渡シタル金圓ニ就キ尙ホ元利ヲ付シ
 或ハ全ク借用セシヲナキ金圓其他謂レナキ拂フヲ自認シタル故ニ時間ヲ經過セシニハ
 非サルナリ然ルニ原裁判所ハ此時間ヲ經タリト云フノ事實ヲ根據トナシ不當極マル乙第
 二號証ニ仍リテ深ク審理ヲモ尽サスシテ該証ノ初メニ(一五拾七圓貸金云々利云々)ト云
 フノ部分ノミヲ採リ遂ニ十四年五月十五日ニ返償シタル金額ヲ其年十月ニ至リテ更改シ
 タルモノトノ推測ヲ降サレシハ誠ニ證據ニ反スル臆斷ト云フヘキナリトノ

判決

本訴ハ上告第一號証ノ金額ハ異シテ被上告第一號証ニ結換ヘタルヤ否ヤヲ審按スルニ在リ而シテ上告者カ結換ヘタルニ非ストスルノ要點ハ上告第一號証ノ金額ハ明治十四年五月十五日完済シ被上告第一號証ハ別途借用ノ契約ヨリ差入レタル儘被上告者カ之ヲ違約シタルモノナリ之ヲ証スルハ上告第一號証ニ(十四年五月十五日濟)トアルト其証書ノ公証ヲ取消シタルハ(同年五月十五日ナリ)ト戸長カ保証アリテ其返済ノ日ハ被上告第一號証ニ先ツ五ヶ月ノ前ニアルト又上告者カ被上告第一號証ハ上告第一號証ノ貸金ヨリ成立タルトノ計算書ヲ明治十四年十月二十日附キ以テ送致シタルト又其上告第二號証ノ目錄中拾五圓貸金トアルモ之ヲ借用セス又拾五錢證文賃拾八錢證文料トアルハ二重ニ屬スル不當ノ計算ナリト云ヘル點コアリ

抑モ上告者カ被上告第一號証ハ上告第一號証ノ金額ヲ結替ヘタルモノニ非スト主張スルハ信憑スルコト由ナシトス何トナレハ特ニ被上告第一號証ノ金額借入レノ契約コト之ヲ差入レタル場合一方ニ於テ違約シタル者ナリセハ該證取戻ノ手續キチ爲スハ勿論ナルコト之ヲ爲サス尙ホ上告第二號証ノ計算書ヲ得ルモ被上告者コト向テ計算不當ノ懸合ヲモ爲セシ形蹟ナケレハナリ況ヤ明治十六年九月十六日富山始審廳ニ於テノ口供ニ(兼テ認狀ニ於テハ金子貸與ヘ異ル、トノ義ニ付本證ヲ差入レタル様申立候得共右ハ全ク自分ノ誤コト會テ原告ヨリノ借用金五十七圓ニ印紙代等ヲ取結ヒタルコトハ相違ナク云々)トアリテ之ヲ控訴狀第三條ニ於テ不當ノ所置ニ爲リタル旨辨解シタルモ遂ニ此任意ノ口供ヲ取消シ得サリシ事實アルニ於テナヤ

又被上告第一號証ノ書入抵當ハ上告第一號証ノ書入抵當ナルヲ以テ第一此公証ヲ取消サ、レハ第二即チ被上告第一號証ニ公証ヲ得ル能ハサレハ其取消ノ後ニ在テ被上告第一號証ノ成立ツヘキハ當然ノ事ナリトス而シテ其時間ニ數月ノ懸隔アレハ實際金額ノ受授コトアラサレハ單ニ遷延シタルノ故而已チ以テ被上告第一號証ヲ無効トスヘキニ非ルナリ又該証金額ノ細目ヲ記シタル上告第二號証カ被上告第一號証ノ日附ニ後ル、モ既ニ承諾ヲ經テ取纏メタル金高ナレハ其細目ヲ記セシ書類ヲ送付シタル日時ノ後ル、モ敢テ妨ケナキモノトス何トナレハ被上告第一號証ノ金額ニ不當ノ事アラハ初メヨリ此証書ヲ差入ルヘキ情理ナケレハナリ由是觀之ハ上告第二號証ニ列舉セシ金額ハ上告者ニ於テ其義務アルチ自認セシモノト謂ハサルヲ得ス故ニ原裁判所ニ於テ(原告)以下同(上告者)ハ公証ノ証書ヲ差入置ナカラ九ヶ月餘ノ久敷九十圓金額ヲ請取ラスシテ黙過スルノ理由ナキノミナラス其二號証ヲ閱スルニ一五十七圓貸金利九圓貳拾三錢一二三四五六六ヶ月「利六圓貳拾九錢九厘四ヶ月」トアルニ依テ事實ヲ推測スレハ原告第一號証ノ金額ハ返済セシモノニアラスシテ被告即被上告者述ノ如ク明治十四年十月ニ至此場合原告カ負タル義務ヲ被告第一號証ニ改更シ吉右衛門俵神保尙吉ニ宛差入タルモノト認定)セシハ決シテ不當ノ裁判ニアラサルナリ右ノ理由ナルヲ以テ大坂控訴裁判所ニ於テ與ヘタル本訴ノ裁判ハ破毀スヘキモノニアラサル也

第百卅八號

○溜井水共同權利爭論 明治十七年一月廿六日上告
全 年三月廿四日申渡

千葉縣上總國市原郡根田村
 平民高橋平三郎外二十二名
 惣代兼同村一番地平民中島
 善藏同六番地平民萩野清四
 郎同七番地平民高橋善松同
 十五番地平民高橋吉平代
 言人
 京東府深川區佐賀町一丁目
 十二番地寄留茨城縣士族
 鴨志田直
 千葉縣上總國市原郡加茂村
 平民
 齋藤七兵衛

上告人

被上告人

外 廿一名

本件ハ溜井水共同權利爭論ノ詞訟ニシテ東京控訴裁判所ノ裁判ニ對スル上告ナリ
 本訴起訴ハ上告者ニシテ其訴旨ハ兩道溜井ノ敷地ヲ共用シ及ヒ該井水ヲ平等分用セントス
 ルニ在リ

原裁判所ハ溜井敷地ノ點ニ對シハ上告者カ本訴溜井ノ敷地ヲ兩村共有ナリト主張スル其第

一二號証ニ關堤代ニ引或ハ關代引トアルモ本訴ノ目安ニ關或ハ堰ト書セサルコト及ヒ上告第
 五號証中溜井普請人足扶持ノ一項アリテ關普請ノ名義ナキトニ依リ古今公私俱ニ溜井ハ則
 溜井ト稱セシコト太々分明ニシテ上告第一二號証ノ關堤トハ本訴溜井ニ對スル証據ニアラス
 ト判決シ又井水ノ點ニ對シテハ上告第三四號証ニ溜井普請入用四分ノ一ヲ上告部四分ノ三
 ヲ被上告村ニ於テ分擔支辨セシ蹤迹及ヒ兩造カ双供吻合セル溜井水分用ノ實況トニ依リ上
 告村ハ四分ノ一則南北二樋中ノ南樋ヲ更ニ分チタル一ノ樋ノヨリ使用スヘキモノト判決シ
 タリ

上告者カ右ノ判決ニ對シ上告要旨左ノ如シ

一 上告第三號証ニ兩村入會溜井云々トアルコト對シ何等ノ判決ヲモ下サハリシハ不法ナリ
 トノコト

二 原裁判所ハ古今溜井ヲ關又ハ堰ト稱セシコトナシト云フヲ以テ上告第一二號証ヲ擯斥セ
 ラレタルモ被上告第九號証ニ關堤大堰ノ文詞アリテ古來溜井ヲ關或ハ堰ト稱セシコト明
 カナリトノコト

辨明

第一條 前第一項ヲ審按スルニ凡裁判所ハ兩造カ提出スル証據物ニ對シ一々説明スヘキニ
 非ス今原裁判所カ上告第三號証ニ對シ説明ヲ與ヒサリシハ蓋シ該証ハ本訴ニ必要ナラスト
 認メタルニ因ルモノナルヘンシテ不法ナルニ非ス

第二條 前第二項ヲ審按スルニ原裁判所カ本訴ノ溜井ヲ古今關又ハ堰ト稱セシコトナシト判

決シタルハ事實ノ認定ニ係ルヲ以テ其當否ニ關シテハ上告ノ原由トナスコトヲ得ス
右辨明ノ如クナルヲ以テ本上告ヲ受理セサルモノ也
第百卅九號

○預ケ金催促事件上告ノ判文明治十六年七月廿一日上告
明治十七年三月廿五日申渡

廣島縣安藝國高田郡桑田村

高杉判右衛門總理代人

上告人

高杉 義太郎

同縣同國同郡廣島區元柳町

寄留島根縣平民

被上告人

植田 増三郎

本件ハ右上告人高杉判右衛門ヨリ植田増三郎ニ對シ甲第一二三號三通ノ証書ヲ以テ預ケ金合
計二千三百三十圓ノ返却ヲ得ント請求シタルニ被上告(植田)ニ於テ本金ハ原被共同ニテ設
置セシ元山舎資本金ノ内へ受取タリト雖モ乙第一號証(副盟約書)ノ通り三通ノ預リ書ハ既
ニ反古ニ屬セシ旨答辨シタル處始終審共原告(高杉)取訴ニ歸シ今仍ホ上告ニ及フ者ナリ其
要領左ノ如シ

第一條

被上告(植田)乙第一號証ノ記名ハ上告者(高杉)ノ自筆ニ非ス又其印肉ノ色モ薄クシテ眞
否分明ナラス然ルコトヲ採用セシハ明治十年第五十號布告ニ以來諸証書ハ必本人自書ス

ヘシ云々ノ法律ニ乖ケルモノナリ

第二條

乙第一號証ニ對シ上告人ハ原裁判所ニ向ツテ印判鑑定ノ事ヲ請求シタルニ採用セスシテ
上告人ノ証據ヲ右乙第一號ニ由テ消滅セシメタルハ疎漏ノ裁判ナリ

第三條

上告人ノ供セシ甲號三通ノ預ケ金証書ヲ以テ元山舎ノ資本金ニ充テシカ爲メ領置セリト
云フハ附會ノ辨ナリ斯ル二重ノ契約ヲ爲セシヨリ上告者ハ三通ノ証書ヲ返戻シ同時ニ元
山舎ヨリ資本金ノ受取書ヲ求メ又被上告者ハ元山舎資本金ノ領収証ヲ上告者へ交附シ同
時ニ三通ノ証書ヲ取戻スコソ普通ノ道理ナルニ其手續ヲナサス上告者ニ充分不利益ナル
契約ヲ爲スノ理ナシ

第四條

乙第一號証第三項「金七百三十圓全年七月三十一日預リ」
第一號ヲ上告者ヨリ出セシモノニ非ルノ証ナリ如何トナレハ甲第三號証ハ七月十三日付
ナルコト乙第一號証ニハ七月三十一日トアリ是レ被上告者ノ手ニ成立ナシテ徵スルニ餘リ
アリ然ルチ原裁判所ニ於テ之ヲ不問ニ附セシハ疎漏ノ裁判ナリ

第五條

被上告者ハ乙第一號証ヲ儘カメシカ爲メ二千三百餘圓ヲ無利息ニテ預クヘキ道理ナシト
云ヒ原裁判所モ亦之ヲ採用セラレタリト雖モ被上告者カ主タル証據トナス乙第一號ニ何

年何日某日預リト明記セシヲ以テ見ルモ無利息預ケ金タル事ヲ彼レ既ニ認諾セシニ非ス
ヤ是ニ於テ被告上告者カ上告者ノ請求ヲ拒ムノ理由ハ消滅セシニ原裁判所ハ其消滅セシ事
柄ヲ採用セシハ審理ヲ盡サ、ル裁判ナリ

第六條

乙第一號証ニ該預リ証三通ハ何レヨリ差出ストモ全ク可爲反古トアリ是レ被告上告者ノ
手ニ成立チタル事ノ分明ナル証ナリ如何トナレハ上告者ノ手中ニ存スル甲號三通ノ証書
ヲ他人ヨリ差出スヘキ筈ナシ畢竟預リ証書ノ上告者ノ手ニ存在スルヤ否ヲ知ラサルヨリ
右等ノ事ヲ故テニ加ヘタルモノコト乙第一號証ハ上告者ヨリ交附セシモノニ非サルヲ証
スルニ足ルヘシ

右被告ニ對シ辨明スル事左ノ如シ

本訴ハ上告人ノ請求セシ預ケ金ハ原被告共同ノ事業ニ關スル元山舎ノ資本金ニシテ甲號三
通ノ証書ハ乙第一號証ノ如ク既ニ反古ニ屬セシモノナリヤ否ヲ判定スルノ一點ニ歸セリ
廣島控訴裁判所ニ於テ甲號三通ノ証書ハ反古ニ歸セシモノト認定シタル理由ハ

- 第一 乙第一號証ハ元山舎ニ從事セシ平野豊兵衛ナル者連署セシトノ事
- 第二 乙第一號証ハ上告人ノ印章ニ相違ナシトノ事

第三 原被告ハ互ニ商業營利ノ間柄ナルコト金二千三百三十圓ヲ無利息ニテ明治十三年
五六月ヨリ明治十五年起訴ノ時迄其儘擱シヘキ道理ナシトノ事

右ノ認定ハ不法ト論スヘキ廉ナシ上告第一條ニ於テ証書記名ノ條件ニ付明治十年第五十

號ノ布告ヲ援引シテ論スル處アリト雖モ右ノ布告ハ訓令ニ關スルモノニシテ本人自署ノ
証書ニアラサレハ裁判上一切効力ヲ有セスト制裁セシモノニ非ス
上告第四條ニ於テ七百三十圓証ノ月日前後ノ條件ニ付論スル處アリト雖モ被告上告者ニ相
當ノ辨解アリ依テ原裁判所カ此廉ニ對シ別ニ判決ヲナス一体ニ上告人ノ申分不相立ト
認定セシハ不法ニ非ス其他上告ノ每條皆事實ノ認定ニ對シテ非難スルモノナレハ以テ上
告ノ理由ト爲スニ足ラス

右辨明ノ如クナルコトヨリ原裁判所ノ判決ヲ可トシ上告受理セサルモノナリ
第四百十號

○借受米殘額請求事件上告ノ判文 明治十六年七月廿四日上告
明治十七年三月廿五日申渡

廣島縣安藝國高田郡桑田村

高杉判右衛門總理代人

上告人

高杉義太郎

同縣同國同郡廣島區猿樂町

被告上告人

田邊文次郎

本訴ハ右高杉判右衛門ヨリ田邊文次郎ニ對シ上告第壹號証ノ借入レ米二百石ノ内未タ引渡
シテ得サルモノ二十四石七斗二升アリトシテ之レカ引渡ヲ得ント求ムルモノナリ
始審裁判所ニ於テハ原被告ノ中間ニ在ツテ曾テ取扱ヒテ爲シタル平野豊兵衛ノ請取書等ニ
ヨリ右米ハ悉皆取引相濟ミタルモノト認定シ廣島控訴裁判所ニ於テハ米七石六斗八升ノ取

引渡額アルモノト認メ此分ノニ被告(田邊)ニ引渡スヘシト判決シタルニ原告(高杉)右ノ裁判ニ對シ上告ニ及ヘリ其旨趣左ノ如シ

上告者ハ平野豊兵衛ニ代理セシメタル事ナク固リ其証據モナシ却テ豊兵衛ハ上告者ノ代理人ニアラサル証アリ然ルニ原裁判所ハ此要點ヲ審究セサルノミナラス管ニ被上告乙第七號証ノ肩書ニ拘泥シ豊兵衛ヲ以テ上告者ノ代理人ト裁判シタリ是レ明治六年第二百十五號布告代人規則ニ背反シタル裁判ニシテ被上告第七號証ハ無効ノモノナリトノ

右ノ上告ニ對シ辨明スル事左ノ如シ
原裁判所カ平野豊兵衛ヲ以テ上告人ノ爲メ代理セシ者ト認定セシ所以ハ被上告乙號數証ハ上告人ノ長男義太郎ノ筆蹟ナルト乙第七號証ニ高杉代理平野豊兵衛トアルニ依據セシモノニシテ不法ト論スヘキ廉ナシ

上告人ハ明治六年第二百十五號ノ布告ヲ援引シテ論スル處アリト雖モ右布告ハ代人ヲ用ユルニ付テノ訓令ニシテ此方法ニ由ラサルモノハ何等ノ證據アルモ裁判上都テ無効ナリト裁制セシモノニ非ス

右辯明ノ如クナルヲ以テ原裁判所ノ判決ヲ可トシ上告受理セサルモノナリ
第四百一十一號

○賣渡田地引渡及殘金請求一件上告ノ判文
明治十六年十一月廿九日上告
全十七年三月廿五日申渡

愛媛縣讚岐國寒川郡末村平民
廣 瀬 平 八
上告人

東京府京橋區三十間堀三丁目五番地

右代言人

西 村 楨 造
愛媛縣讚岐國三木郡下高岡村平民

被上告人

白 井 太 次 郎

本件ノ顛末タル明治十五年四月中上告人ハ被上告ヨリ田地ヲ買受ケ手附金ヲ渡シ殘金ハ退テ拂入ヘキ旨ノ証書ヲ差入置タリ被上告人ヨリ由地ヲ上告人ヘ引渡シ而シテ右殘金ヲ受取ントテ起訴シタリ上告人ハ其代價ノ高直ナルヲ地券名義ノ未タ自分名前ニナラサルヲ殘金拂入ニ期限ノ定ナキヲ及被上告人カ明治十五年十二月ニ該田地ノ小作米ヲ徵收セシヲ等ノ點ヲ掲テ右手附金ヲ返却シ破約スヘシトテ之ヲ拒ムノ爭ナリ

上告人ハ始審扣訴共曲者タルノ裁判ヲ受ケタリ依テ扣訴裁判ヲ不當ナリトシテ上告スル注點左ノ如シ

- 一 被上告人ノ証據ナキ口頭ノ陳述ヲ採テ裁判ノ材料トサレシハ不當ナリトノ
- 一 本訴殘金ハ無期限ノ契約ナレハ明治六年太政官第十號公布ニ依リ濟方ノ期限ヲ定ラレタルハ不當ナリトノ

右主點ト上告狀トヲ照シ之ヲ按スルニ上告人カ被上告人ノ口供ニ明治十五年十二月中ニ本訴田地ノ小作米ヲ預リ置タルハ上告人 扣訴 遠隔ノ地ニ在ル故此事ヲ自分ニ依頼タシル原告

ニ付之ヲ預リ置ケリ地所殘金等夫々處分ノ節ハ上告人へ引渡ヘキ旨申立アルヲ今更口頭無証ナリト申立レモ詞訟人ノ口供ヲ取捨スルハ裁判官ノ權内ニ在ルモノナレハ之ヲ以テ破毀ノ理由トナスヲ得ス

又本訴殘金拂入ノ一ハ無期限ナルヲ以明治六年太政官第十號公布ニ依リ裁判申渡ノ日ヨリ十二月ノ内濟方スヘキモノナリトノ旨申立レモ右布告ハ金穀貸借証書ノ期限ナキモノヲ制裁スルモノニシテ本訴ノ如キ物件代價引殘金ニ援引スヘキ法律ニ非ストス

判決

右ノ次第ナルニ付大坂控訴裁判所ノ判決ヲ可トシ上告受理セサルモノナリ
上告入費ハ上告人ヨリ辨納スヘシ
第四百二十二號

○地所取戻シ一件上告ノ判文明治十六年四月廿三日上告
明治十七年三月廿六日申渡

埼玉縣武藏國北葛飾郡高柳
村百二十五番地平民橋本清
次郎代人東京府京橋區新肴
町十九番地

上告人

片岡新兵衛

同縣同郡佐間村八番地

平民

被上告人

本島紋次郎

東京控訴裁判所ノ裁判ニ係ル地所取戻ノ訴訟上告一件審理ヲ遂ル處左ノ如シ

本件ハ上告者ノ起訴スル所ニシテ所爭地所ハ慶應元年ヨリ明治七年迄被上告者ヨリ借受
シル金員七十二圓ニ對シ其返辨ヲ保証スル爲メ地券ト俱ニ預ケ置タルモノナリ仍テ借用
金ト引替ニ之カ返戻受ケテト請求シタリ

被上告者ハ論地ハ慶應三年上告者亡父へ貸付金百七十圓ノ抵當トシテ質地ニ取タルヲ明
治八年示談ノ上乙第一號証ノ一ノ如ク更ニ買受ケ乙第二號證ノ如ク地券證ヲモ下付セラ
レ純然タル被上告者ノ所有ナルヲ以テ返戻スル義務ナシト抗辨シタリシ

右ニ付原裁判所カ判定シタル事實及適用シタル法理ノ要點左ノ如シ
乙第一號証ノ一ハ地券書換願書ノ寫ナルモ原被告并ニ正副戸長等之ニ押印シ所轄縣廳へ
差出シアル旨舊戸長橋本監三之ヲ証明シ且乙第二號証ハ地所々有權ヲ確實ナラシムル地
券証ニシテ被上告者カ之ヲ得ルニハ公正ノ手續ヲ爲タル數証アリ然ルニ上告者ハ一モ其反
証ヲ掲ケサルニヨリテ之ヲ看レハ本訴ノ地所ハ被上告者申立ノ如ク明治八年七月中被上
告者へ所有權ヲ移シタルモノト認定ス依テ上告者カ被上告者ニ對シ該地ノ取戻ヲ請求ス
ル權利ナシト言渡ケリ

右ノ裁判ニ對シ上告スル要旨左ノ如シ

第一 被上告者ハ初審應ニテ質代金ハ忘却セリ云々明治八年七月中質代金及外若干圓ヲ
加へ總金二百六十圓ニテ買取タリト陳供シナカラ控訴應ニテハ被上告乙第一號証第一ノ

手續ヲ以テ買取タリト云如キ前後撞着ノ陳述ヲ爲シタルニ原裁判所ハ乙第一二號証ヲ偏信シ上告者ニ取戻ノ權ナシト裁定セラレタルハ不當ナリトノ事

第二 乙第一號証ノ一ハ直接賣買ノ證ニアラスシテ間接ノ徵表ニ過キス而シテ間接ノ徵表ハ一方之ヲ認ムルカ若シハ認メサルヘカラサル理由アルヲ要スヘキニ一私人ト異ナラサル舊戸長ノ證明ナリトテ上告者ノ認メサルニモ拘ラス之ヲ採用セラレタルハ不當ナリトノ事

第三 被上告者カ公正ノ手續ヲ經テ地券證ヲ領収シタルニヨリ所有權移轉シタリトスルハ本末ヲ誤リタルモノナリ何トナレハ主タル賣買契約ノ有無明瞭ナラサルニ枝葉ニ關スル事柄ヲ採テ本原ヲ定ムルハ恰モ實ナキノ名ヲ追ト一般ナレハナリトノ事

辨明

原裁判所カ本訴地所ハ上告者申立ノ如ク預ケタルニ非ラスシテ被上告者申立ノ如ク所有權ヲ移シタルモノナリト言渡タルハ原被告カ申立タルニ簡ノ事實中其一ニ定メタルモノナリ上告者ハ右ノ判定ニ對シ不當ナル旨申立レ其論辨ハ事實判定ニ對シ苦情ヲ唱フルニ止マリテ法律ニ關係アリト看ルヘキ廉毫モコレナキナレハ以テ上告ノ原因ト爲スヲ得ス

又上告者ハ原裁判所カ上告者ニ於テ該地ノ取戻ヲ求ムル權利ナシト言渡タルハ不當ナル旨ヲモ申立レ既ニ前記事實ノ動カス能ハサル以上ハ上告者カ返戻ヲ求ムル權利ナキハ無論ナルヲ以テ不當ト爲スヲ得ス

判決

右ノ理由ナルヲ以テ本上告ハ受理セサルモノナリ
第四百十三號

○地所名前書改一件判文
明治十七年二月十二日上告
全 年三月廿六日申渡

新潟縣越後國中蒲原郡舟戶

山新田第百十一番地平民

藤 田 周 太

東京府日本橋區小網町四丁

目貳番地寄留新潟縣平民

竹 内 増 藏

新潟縣越後國南蒲原郡本成

寺村第二十八番地平民

鈴 木 幸 三 郎

被上告人

判決

本件ハ上告人ノ起訴ニ係ルモノナリ其訴旨タルヲ論地ヲ被上告人ヨリ買得シタルニ依リ其所有ノ名前ヲ書替ント請求スルニアリ被上告人ハ論地ヲ賣渡タル覺無之ニ付應セスト之ヲ拒ムノ詞訟ナリ

上告人ハ始審控訴共曲者トナリ右控訴ノ裁判ヲ不當ナリトシテ今回上告スル其主點左ノ如

上告甲第六七九號ノ三證ハ上告者カ論地ヲ所有スヘキノ確證ナリ原裁判所カ是等ノ三證ヲ採用セス被上告者ノ偽言ヲ信用サレシハ不當ナリトノコトヲ依テ按スルニ原裁判官カ右三個ノ證據ヲ斥ケシハ該證上項要ノ宛名ハ後日ノ書入ニ係ルモノナルコトヲ上告人モ自認セシヲ以テ上告人控訴カ論地買得セシコトナキノ一理由トナシタリ然ルニ之ニ對シ今續々上告スルハ謂レナキコトニシテ右理由ヲ動カスヲ得サルモノトス其他上告要領書中種々ノ陳述アルモ主點ノ外ナルニ付辨明セス右ノ筋合ナルヲ以テ東京控訴裁判官カ本訴ニ與ヘタル裁判ヲ可トシ本上告ハ受理セス第百四十四號

○卸地取戻一件上告ノ判文第二
明治十六年七月十九日上告
明治十七年三月廿六日申渡

- 福井縣越前國大野郡大袋村
- 三十九番地平民酒井力藏同
- 郡畔川村二十六番地平民松浦善右衛門代人
- 東京府京橋區元數寄屋町一丁目四番地寄留群馬縣平民桑原滿義
- 福井縣越前國大野郡大袋村

酒井與兵衛外九名總代兼同村平民

中村惣兵衛
東京府京橋區桶町二十二番地寄留福井縣士族中島又五郎

本訴卸地取戻一件ハ東京控訴裁判所カ下シタル第二覆審裁判ノ一部分ヲ破毀シ更ニ本院ニ於テ受理シタル第三覆審ノ訴件ナリ而シテ其審判ヲ爲スヘキ事柄ハ曩ノ確定裁判〔大坂控訴第一覆審裁判ノ一部分並ニ東京控訴裁判〕ノ効力ニ依リ其範圍狹少トナリ今ヤ單ニ原告第一號証第二項ノ附書ニ「田百步ニ付步數三反三畝十步」トアルハ「一反三畝十步」ノ誤記ナルヤ否ノ一點ニ歸シタリ依テ原被兩造ノ陳述ヲ聽キ證據ヲ檢シ曩ノ本院辨明ニ照シ之レカ判決ヲ下ス左ノ如シ

本院辨明ニ曰「第一號証第二項ノ地所ニ對スル卸米タルヤ追期増額スルノ目的ナルコトハ其明文ニ瞭然タリ然ルニ其附書ノ百步步數三反三畝十步ハ一反三畝十步ノ誤記ニ非ストセハ第二項ノ地所ヲ十五ヶ年ノ後上田トナリタルモノト假定シ其収額ヲ前期ノ収額ニ比スレハ甚タ僅少ナルノミナラス其約定ニ基ツキ地位上中下ノ等級ヲ立テ其収額ヲ遞減セハ前期ノ収額ヨリ減少セサルヲ得サル譯合ナリ十有五年ノ久シキ耕耘ニ尽力セハ其地ノ肥沃ニ趣クハ自然ノ勢ナルニ其時ニ至リ反テ収額ノ減スルカ如キ他ニ特別ノ原因アルコトアラサルヨリ

ハ成立ツヘキ謂レアラサルナリ加之被告上告人^今カ原裁判所へ差出タル書面ニ「云々」ト申立ルニ依レハ第一項ノ地ト第二項ノ地ト開墾竣功ノ上ハ其地位及ヒ収獲等ニ格段ノ差等ヲ生スルモノト看認メ難シ然ルモ第二項ノ百疇ハ三反三畝十歩トシ此計算ニ依テ第一項ノ収額ニ比較スレハ第二項ノ収額ハ第一項ノ収額ノ半ニ下レリ夫同一ノ趣意ニテ成立タル要償契約ニテ彼是如此収額ノ厚薄アルヘキ謂レモ亦アルヘカラス然レハ他ニ其反對ノ理由アラサル限リハ其附書ノ三反ハ誤記ニ出タルモノト認定セサルヲ得ス」ト依テ今其反對ノ理由アルヤ否ヤヲ密接スルニ原告ニ於テ右附書ノ誤記ニアラスト主張スル理由ハ要スルコ第一該證第二項ニ「附リ」トアリテ「但シ」トアラサレハ其附書ノ田百疇ニ付歩數三反三畝十歩ハ第一第二ノ兩項ニ通シ用ユヘキ書式アリ第二壹反三畝十歩ヲ以テ田百疇歩數トスルノ通語ナリ又三反三畝十歩トノ通語モナシ個ハ其地位地味ノ等級ニ因リ畝歩ノ廣狹ヲ定ムルモノナリ故ニ論地全部ノ田百疇歩數ヲ三反三畝十歩ト登記シタルナリトノ二點ニ過キス然ルニ右第一ノ理由ハ第二覆審裁判ニテ第二項ノ附書ハ第一項ニ通シ用ユヘキモノニアラスト確定シタルモノナレハ今復論スヘキ限ニアラス其第二ノ理由モ第二覆審裁判ニテ田百疇ハ一反三畝十歩ノ慣習ト確定シタル者ナレハ是亦動スヘカラスルモノトス其他種々申立ル所アリト雖モ本案ニ緊要ナラサル事柄或ハ疑ノ確定裁判ノ範圍内ニ侵入シタル論辨等ニシテ一モ採用スヘキ反對ノ理由アルニ非ス依テ本院辯明ノ如ク右第二項ノ附書ニ田百疇ニ付歩數三反三畝十歩トアルハ壹反三畝十歩ノ誤記ト認定ス但訴訟入費ハ原告ノ負擔タルヘシ

第四百十五號

○貸金請求反對豫審事件上告ノ判文 明治十六年六月十五日上告
全 十七年三月廿七日申渡

熊本縣肥後國天草郡宮野河

内村平民

上告人
池田治海

池田順作

右代人

小山頴吉

被上告人

同縣同國同郡新合村平民
箕田善次

本訴ハ獨ニ被上告人ヨリ上告人ニ對シ貸金請求ノ訴訟ニ及ヒシ處其節原告ノ代理人佐藤龍藏ナル者無届コテ不參シ夫カ爲メ被告即今般ノ上告人ハ旅費ヲ失ヒ迷惑ニ付豫テ原被連署ニテ差出シ置キタル受書ノ旨ヨリ本日限リ本訴取消ノ處分有之度旨明治十四年十二月十四日ヲ以テ被告ヨリ請願セシ處熊本始審裁判所ハ即日被告願ノ通り本訴取消シタル旨申渡シタリ

爾後原告^人上告^人ハ明治十五年七月十四日ヲ以テ更ニ本訴ヲ起セシ處被告ハ曩ニ訴訟權取消ノ裁判確定セシ旨ノ申立答辨スル事ヲ拒ミタレトモ始審終審トモ最前ノ處分ハ只訴狀ヲ取

消シタル迄ニテ原告カ貸金ヲ請求スヘキ權利ヲ取消シタル筋コ之レナシト判決セシテ被告ニ於テ審理不尽ノ裁判ナリトシテ更ニ上告ニ及ヘルモノナリ其旨趣左ノ如シ
熊本始審裁判所ニ於テ爰ニ本訴ヲ取消サレタルハ「若シ期日ニ至リ無届不参スルトキハ本訴御取消ノ御裁判相成候共聊遺憾ノ筋無之」トノ契約ノ執行ヲ上告人ヨリ請願シ裁判所ハ之レヲ執行セラレタル筋合ニシテ訴權ノ取消ハ無論此中ニ含蓄スルモノナルニ長崎控訴裁判所ハ訴狀ヲ取消シタル迄ニテ訴權ニ關セサル旨言渡サレタルハ審理ヲ尽サ、ル裁判ナリトノ事

右之上告ニ對スル辨明

熊本始審裁判所ノ處分ハ長崎控訴裁判所ノ見解ノ如ク原告ノ無届不参ニヨリ一旦訴狀ヲ却下セシ筋ニテ再ヒ訴訟ヲ爲スノ權利ヲ失ハシメタルニ非ス出訴期限ヲ經過セサル間ハ再ヒ訴フルヲ得ヘキモノトス依テ原裁判所ノ豫審ノ言渡シニ對スル上告ハ受理スヘキ筋合ニアラス

第四百十六號

○用水池水割相違一件上告ノ判文明治十六年六月廿五日上告
全十七年三月廿七日申渡

愛媛縣讚岐國香川郡福岡上
村總代同村平民

上告人 藤田清平
同 谷本文平

同 藤澤藤一郎
同 森塚藤五郎

右代言人 東京府京橋區南鍋町一丁目
四番地寄留佐賀縣士族
土山虎四郎

愛媛縣讚岐國香川郡松繩村
野田池水掛リ

被上告 松繩村

本件ハ被上告松繩村ニアル野田池ノ水割ヲ爭フモノニシテ上告福岡上村ハ起訴者ナリ其訴趣タル該池ノ水ハ之ヲ七分シ被上告松繩村カ引用スヘキ分ハ四分ナリ其四分ノ内二分ハ該池ニ設置アル返搖ヨリ之ヲ引キ他ノ二分ハ本搖ヨリスヘキモノナリト云ヒ被告村ハ自村カ引クヘキ四分ノ水ハ本搖ヨリ引クヘキ分ニシテ返搖ヨリ引ク分ハ水割ノ外ナリト云ヒ双方其第一號証ニ池水七割七番割トアルモノ等ヲ掲ケテ相爭フモノナリ
上告村ハ始審裁判ニ於テ敗訴セシニ付控訴シタリ
此控訴ニ對シ大阪上等裁判所ハ原告第一號池記錄等ヲ審查シテ返搖ノ水ハ度外ニ非シテ七割ノ中ニ屬スヘキ旨裁定シ被上告村敗訴シタリ
依テ被上告村ハ此裁判ヲ不當ナリトシ爰ニ上告セリ其上告中本搖返搖ノ位置ニ高低アリ搖穴ニ大小有テ池水増減等アルアレハ兩搖ヲ合シテハ實際水割ヲナス能ハストノ旨申立

アリ當時ノ被上告村現今上告福岡上村ハ之ニ對シ其兩搖ノ高低穴ノ大小アルハ返搖ヨリ二分ヲ引
爲ニ構造シタルモノナル旨陳述セリ

斯ノ如キ上告ナリシニ付本院ハ左ノ如ク辨明判決ヲ與タリ證據辯明等

大阪上等裁判ノ末項ニ該地配水ハ原告村今ノ上申立ノ通タル可事トアルハ該池ノ水割ヲ

七ツトシ其二分ハ返搖ノ水掛リトシ本搖ニ於テハ配水ヲ五ツ割ト爲スモノナリトノ旨意

ナレハ原告今ノ被上告村云カ如ク本搖返搖兩口ノ配水ノ量ヲ合シテ七ツ割ト爲ス一ハ如何ナル

方法ヲ以テ分量シ得ヘキヤ之ヲ定タルノ憑據ナケレハ右ノ兩搖ヲ合シテ七ツ割ノ配水ハ

實際其量定ノ行ハル可カラサルヤモ知ル可ラス果シテ實地配水ノ量ヲ定メ得可ラサルニ

於テハ返搖ハ水七割ノ約定ノ外ナルモノトシ本搖ノ水掛リヲ以テ七ツ割トシタルモノト

認定セサルヲ得サルモノトス況ヤ證書上返搖ノ水掛リモ七割ノ内ニアリトスルノ明記ナ

ク又其返搖ハ池水ヲ引入レ貯フルノ用ノミナラスシテ實地原告カ從來耕地ノ灌水ニ用來

ルコトハ被告モ之ヲ認許セルモノナルニ於テヤ故ニ兩搖ノ水掛ヲ合シテ七割トスルコトハ

平等ニ其分量ヲ爲シ得ヘキモノナルヤ否ヤヲ審究シテ約定證書ヲ解釋シ以テ裁判ヲ與ヘ

サレハ其約定ノ實際ニ適當スルヤ否モ知ル可ラサルモノトス然ルチ大坂上等裁判所ハ右

ノ審究ナクシテ判決シタルハ尽スヘキ審理ヲ尽サル不法ノ裁判ナリトスト申渡シ之ヲ

東京上等裁判所ニ移シタリ

於是被上告松繩村ハ上告福岡上村ヲ相手トシテ東京上等裁判所後テ東京控訴ニ向ヒ破毀

後ノ審判願ヲナシタリ裁判所ト改稱

此審判願ニ對シ東京控訴裁判所ハ實地ニ臨ミ本搖返搖ノ位置勾配及水穴伏樋ノ大小高低
兩搖近傍池底ノ淺深ヲ取調ヘ且ツ測量師ノ陳述ヲ聽キ其他證據物ヲ説明シテ返搖ヨリ溢
出スル水ハ甲乙第一號証記載ノ七ツ割トハ格別ナリト裁定シ上告福岡村敗訴シタリ依テ
今再上告シテ破毀ヲ求ムル主點左ノ如シ

一 原裁判所カ本訴ニ係ル返搖ヲ指テ水充滿スルニ隨ヒ自然ト該搖ヨリ河溝ニ返ルノ稱ト
サレシハ事實ニ適セサル臆斷ナリトノコト

一 上告被上告双方ノ第一號証ノ水割ヲ本搖ノミニ關スルトサレシハ不當ナリトノコト

一 原判文ニ返搖ヨリ池水七分ノ二ヲ引クノ契約ナカルヘカラストアルモ箇ハ被上告ニ責
ヘキコトコシテ上告者ノ受ヘキ責任ニ非ストノコト

一 甲第一號証中ニ水取渡ノ文句アルチ以テ返搖ノ水ハ度外視シタリトサレシハ不當ナリ
トノコト

一 今里村ノ證言ハ曖昧ナルモノナルコト之ヲ執テ裁判ノ材料トサレシハ不當ナリトノコト

一 上告人ノ番外六號証ハ本訴ニ於テハ錢ノ大審院辨明ノ旨趣ニ因テモ最緊要ノモノナリ

而シテ算數上ニ係ルモノナレハ到底其飯着ノ届チナスヘキモノナルニ之ヲ採用サレサ
リシハ不當ナリトノコト

一 辨明

右第一點ト上告第二項トヲ照シ原裁判文ヲ見ルニ「抑返搖ト稱スルモノハ元來貯水スル

ニ當リ河水ヲ池内ニ灌入スル爲メ構成セシモノコシテ水充滿スルニ隨ヒ池水自ラ該搖ヨ

リシハ不當ナリトノコト

六四七

リ河溝ニ返ルヲ以テ此稱アリトアリ依テ控訴裁判所ニ於テノ原被ノ口供ヲ取調フルニ返搖ノ前面ニ溝アリテ該搖ヨリ出ル水ハ一旦此溝中ニ落テ而後テ耕地ニ灌クモノナル旨申立アリ原裁判官カ河溝ニ返ルト云シハ此口供ニ職由セシモノナルモ水充滿スルニ隨ヒノ句自ラノ字ヲ下セシハ恰モ其水ハ放流ト云シカ如シテ穩當チ欠クモノトス然レモ本訴ヲ審理スルハ返搖ノ排水ハ全池水七分ノ二ニ該ルヤ否ノ一點ヲ最要トス原裁判官カ此最要點ヲ失セサリシハ判文ノ緒言ニ於テ之ヲ明示セシノミナラス放流スルノ水ヲ争フヘキ譯ナキハ論ヲ俟サルモノナレハ返搖ノ用ヲ説明スルコト不穩當ノ字句アルモ本按ニ影響セサルモノトス

第二點ト上告狀第三項トヲ照スニ上告人ハ今更甲乙第一號証ニ水七ツ割或ハ七番割トアルハ全池水ノ割ニシテ返搖ノ排水ハ之ヲ度外ニスルノ意義ニ非ストノ旨申立レモ右ハ本訴初審來原被ノ反覆論争セシナリ然ルニ該証中返搖ノ水ハ七割ノ内ニ屬スヘキカ之ヲ外ニスヘキカノ明記ナキニ依リ爰ニ本院ニ於テモ池水ノ量定ヲナシタル上約定証書ヲ解釋スヘシト辨明セシ所以ナレハ右ト上告人ノ解釋ハ上告人一已ノ見ナリト云ヘキノミ第三點ト上告第四項トヲ閱スルニ上告村ハ起訴者ニシテ返搖ノ排水ハ証書記載ノ七分ノ二ニ該ルナリト主張スルモノナレハ其証ヲ掲クヘキハ當然ナリトス左スレハ原裁判官カ上告村ノ申立ノ如クナレハ其契約ナカルヘカラスト申渡セシトテ証書解釋法ニ違フト云チ得サルモノトス

第四點ト上告第五項トヲ比照スルニ水取渡ノ項目ニ付上告村カ申立ル所ハ要スルコト原判

官ト見解チ異ニスルト云ニ過スシテ破毀ヲ求ムルノ因由トナスチ得サルモノトス

第五點及上告第六項トヲ參觀シ之ヲ按スルニ引合今里村ノ口供第六項ハ老人共ノ申傳チ述タルモノナレハ其効力最モ薄弱ナリト論セサルチ得ス然ルニ其三四項ニ於テ明治八九年比迄池水七分ノ水ハ皆本搖ヨリ引キ來タリトアリ其五項ニ返搖ヨリ松繩村ノ引水スルモノハ近年ノ處ニテハ七分ノ外ニ有之候トアリテ現在其存知アル處チ申立タルモノニシテ被上告村ノ申立ト轍チ同スルモノナリト上告人ハ之ニ對シ其五項ト六項トヲ對照スレハ其說撞着スト申立レモ其現ニ存知スル處ト老人ノ口碑トチ有体ニ云タルモノナレハ之ヲ撞着スルトテ擯斥スルチ得ス又近年ノ處トアルハ爲ニスル處アルナリト云ト雖上告人ノ想像ニ係ル迄ニシテ其適証ナシ畢竟此口供ニ付上告人カ論越ハ是亦原裁判官ト意見チ異ニスル迄ナレハ原裁判官カ右口供ヲ採テ被上告松繩村ノ申立ト概チ相似タリトノ旨申渡セシトテ之ヲ不當ト云チ得サルモノトス

右第六點ト上告狀第七項トヲ參觀シ之ヲ按スルニ抑本訴野田池水測量ノ事タル原被双方カ信任ノ上測量セシメタル測量師三名ニ於テ本搖返搖ヨリ灌漑スル水量ハ實測シ難シト明言シタリ然ルニ上告村ハ其後一己ノ周旋ニテ所々ノ計算書ヲ需メ追々之ヲ提出シタリ之ヲ番外第三四五六號ノ四証ナリトス就中右六號証ハ其計算者三浦健ナル者審廷ニ於テ之カ說辯チナシ上告村モ固ヨリ此証ヲ以テ精ニ精チ加ヘタリトシテ大ニ恃ム所ナルモ其計算タル彼三四五號ト同ク返搖ノ排水ハ全池水七分ノ二ニ平等確適セサルナリ今夫上告人ハ此確適セサル點ヲ彌縫シテ甲第一號証ニ記載アリ池水七ツ割ニ在テ大體ノ分

量ヲ目算セシモノナリトシ右六號証ノ計算ト自ラ符合スヘキ旨時代ノ新古理學ノ精粗等
 ナ以テ種々論スル所アルモ畢竟自家牽強ノ説ニ止ルモノトセサルヲ得ス又實体アルモノ
 ナレハ幾回計算スルモ妨ナク到底版着ノ局ヲ結フヘキモノナレハ相手方モ裁判官モ之ヲ
 疑アラハ自ラ精算スルカ或ハ鑑定人ヲ要スヘキモノナルヘントノ旨申立レハ右計算書ハ
 技術家ニ於テ公式ヲ經テ其實ト法トニ因リ計算ナシタルモ池水七分ノ二ニ適セザリシ
 迄ノモノナレハ他ヨリ疑ノ生スヘキ理由ナシ上告人ノ所論ヲ約スレハ確適ナラサル証據
 物ヲ自カラ差出シナカラ其確適ナラサル廉ハ他人ヨリ之ヲ改正スヘント云ニ同シキ筋合
 コシテ條理相立難キモノトス夫レ原被ヨリ撰擢セシ測量家カ實測シ難シト云シテ一方ニ
 於テ不滿ナリトセハ尙双方協議ノ上再ヒ他ノ技術家ヲ雇カ如キハ格別其義ナクシテ各自
 々々ニ於テ只樣計算書ヲ出シ其合ハサルモノハ又他ノ計算ヲ求ムル如キニ到テハ其結局
 ノ日ヲ見ルヲ難シト論セサルヲ得ス左スレハ原裁判官カ原被ヨリ雇入タル測量師ノ確言
 ナ以テ裁判ノ材料トシ番外數號証ヲ指テ隨テ出セハ隨テ異ナリテ版着スル所ナク返搖排
 氷ノ七分ノ二ニ適スルノ証一モナシトテ之ヲ斥ケタルハ相當ノコナリトス

判決

右辯明ノ理由ニ付明治十六年四月廿七日東京控訴裁判所ノ裁判ヲ可トシ上告受理セサルモ
 ノナリ

第四百十七號

○損害金請求一件上告判文明治十六年十一月十日
 明治十七年三月廿七日申渡

静岡縣遠江國豊田郡二俣村
 二百五拾三番地平民

上告人

杉 浦 龜 吉

同

同縣同國同郡同村

笠 井 勝 十

同

外一名

東京府深川區佐賀町一丁目

十二番地寄留茨城縣士族

右代言人

鳴 志 田 直

静岡縣遠江國長上郡掛塚村

平民

被上告人

村 越 伊 三 郎

本件ハ被上告人(村越伊三郎)ノ起訴ニシテ始メ伊三郎外壹名ハ上告人(笠井勝十)外二名ヨ
 リ甲第一號証ヲ以テ字釜ノ澤立木ヲ買受ケ退々伐採シテ運搬ヲ爲ス場合ニ方リ他ノ栗田輝
 永ナル者ヨリ差留メノ訴訟ヲ受ケタルニ付賣主笠井等ヲ其訴訟ニ參加セシメ輝永カ故障ヲ
 解除セシメタルトモ笠井等ノ辨解相立タスシテ之レヲ差止ラレタリ
 然ルニ買主タル村越伊三郎ハ(外壹名)買主ハ其後ニ組(右材木ヲ横濱尾上町椽尾平兵衛へ
 合テ退キ村越一人トナル)賣渡シ明治十五年十月五日ヲ限リ引渡スヘキ契約ニテ手附金五百圓ヲ受取若シ違約スルト

キハ手附金二倍ヲ返却スヘキ旨ヲ約シ置タル處右栗田輝永カ故障ノ爲メ期日ニ到リ引渡ス事能ハス遂ニ平兵衛ヨリ出訴ニ及ハシタル末明治十五年十月十五日ヲ以テ左ノ通り履行シタリ

金五百圓

手附金返却

金千圓

手附金二倍

此内

二百圓

即日渡シ

五百五十圓

本月二十日

二百五十圓

切捨勘辨

右之損害ハ栗田輝永カ差止メヨリ生スル義ニ付運搬自由ヲ得ルカ又ハ平兵衛ヘ賠償セシ七百五十圓ノ償ヲ得ント請求シタリ
濱松始審裁判所ハ村越伊三郎カ橡尾平兵衛ニ償金ヲ出セシモ之ヲ前知セサル笠井等ニ負擔セシムルヲ得スト判決シタリ
村越伊三郎ハ右ノ裁判ニ承服セス控訴ニ及ヒ且此際請求金高チ五百圓ニ減シタリ
上告人笠井等ニ於テ村越伊三郎カ橡尾平兵衛ニ勘辨ヲ受ケタル貳百五十圓ヲ本訴ノ五百圓ノ内ニテ引除クヘキ旨ナリト申立タリ
然ルニ東京扣訴裁判所ハ控訴人請求ノ通り金五百圓ヲ辨償スヘキ旨被控訴人ヘ言渡シタリ
本按ハ右ノ判決ニ對スル上告ニシテ其要領左ノ如シ

第一條

甲第一號証書ノ立本ヲ被被告人ヘ賣却シタル上ハ被上告者ニ於テ伐採スルモ他人ニ賣却スルモ聊カ不都合等ハ申問敷トノ意ニ止マルモノニテ被上告者カ他人ニ對シ手附金流レ倍返シ等ノ特約ヲ爲スヲ許諾シタルニ非ス該証ハ文意明晰ニシテ毫モ推測ヲ要スル處ナキノミナラス手附金流レ倍返シ等ノ約束ハ我國ニ於テハ特約ノモノナルヲ原裁判所ハ普通ノトトナシ甲第一號証ニ該立本賣却ヲ許諾シタル上ハ手附金流レ倍返シノ約ヲ爲ストモ許諾シタルモノナリトノ裁判ハ不法ナリトノ

第二條

又甲第一號証ノ明文ヘ被上告者カ他人ト隨意ニ爲シタル手附金倍返シノ如キ特約金ノ償ヒマヲモ約諾シ又時日ヲ限り得明ケ可シト約束セシモノニ非ス他ヨリ苦情ヲ唱フレハ之ヲ得明ケ被上告者ノ迷惑ナラサル様取計フヘシトノ意ニ過キサルモノコト栗田輝永ヨリノ拒障ニ付テハ上告者カ其解除ニ從事シタルハ原裁判所モ承認セラル、所ナレハ上告者ハ該証明文ニ對スル責任ハ尽シタリト言フヘシ被上告者カ請求スル損害金ハ被上告者ト橡尾平兵衛トカ隨意ニ結ヒタル特約ニシテ固ヨリ上告者ノ承認セシモノニ非サレハ上告者ハ之レヲ辨償スル義務ナキニ原裁判所ハ彼カ特約ヲ普通ノトトナシ此損害ヲ償フヘキモノナリト判定セシハ不法ナリトノ

第三條

被上告者カ栗田輝永トノ詞訟ニ付明治十五年九月廿二日豫審裁判アリタルトハ明治十五

年十月九日被上告カ本訴ノ勸解ヲ出願セシニヨリ勸解廳ニ出頭シ承知シタリ故ニ平兵衛ト材木賣買ノ約ヲナシタルヲモ其日始テ聞ケリ依テ十月五日以前拒障解除ノ必用アリシヲ知ラサルノミナラス上告者ハ斯ル日子ヲ限リタル契約ヲナサハルヲ以テ該日迄ニ解除スルノ責任ナク又被上告カ本訴ヲ起シタルハ明治十五年十月十六日ニテ甲第四號証ハ其十七日ナレハ本訴勸解出願起訴ノ當時ハ未タ手附金倍返シノ履行ヲナサズ始審出訴後甲第四號証ヲ成立シタルハ上告者ヘ對スル材料トナスノ意ナルヲ明カナレハ明治十五年十月五日ニ及フ迄拒障解除ヲ爲シ得サリシトテ本訴ノ訟求ニ應スヘキ理由アラサルニ原裁判所カ本訴償金ハ相當ナル理由アレハ之レヲ拒ムヘキ理由ナキトノ判定ハ不法ナリトノ

第四條

被上告者カ勸解ヲ出願シタルハ明治十五年十月二日ナリ始審出訴ハ其月十六日ニテ甲第四號証ノ成立ハ其十七日ナリ又上告者カ勸解廳ヘ出頭ヲナス迄平兵衛ヘ材木賣却ノ約ヲナシタルヲ言ハス且平兵衛ヨリ被上告者ヘ對シ其月十二日勸解ヲ出願シ又損害金ヲ最初ハ千圓要求シ始審審理中二百五拾圓ヲ減シ控訴ニ至リ又二百五拾圓ヲ減セシ等ハ怪訝ニ堪ヘス是等ノ點ヲ指示シ被上告ト平兵衛ト馴合タリト斷言シタルニ原裁判所ハ之レヲ看破スル能ハス馴合ノ証左ナシト判定セシハ審理ヲ誤リ又上告者ノ代理人カ始審廳ニ於テ爲シタル口供ヲ材料トシテ上告者ノ陳述ヲ無効視セラレタルハ疎漏ヲ免カレサル不法ナリトノ

辨明

本接ハ左ノ辨明ニヨリ上告ノ相立難キ事理ヲ了知スヘシ
 通常物件ノ賣主ハ其賣渡シタル物件ニ對シ故障ナキヲ擔保スヘキハ自然ノ義務ナリ且特約ナキモノハ通常ノ賣買ト看做ルヘキモノトス
 又物件ノ買主ハ其買求メタル物件ヲ己レノ隨意ニ處分スルノ權アル事勿論ナルヲ以テ買取リタル物件ヲ更ニ他方ヘ賣渡スノ契約ヲナスモ獨ノ賣主ヘ告知スルヲ要セサルナリ是ヲ以テ買主買取リタル物件ニ對シ故障ヲ受ケ他ヘ賣却スルヲ能ハス爲メニ損害ヲ受ケタルトキハ之レヲ己レニ賣渡シタル者ニ對シ賠償ヲ得ント求ムルハ當然ノ事ナリ此場合ニ於テ其損害ノ無實ナル證アルニ非サレハ賠償ノ求メヲ辭スル事能ハサルモノトス
 今ヤ上告人ハ被上告人ト椽尾平兵衛トノ契約ハ特約ナリ又ハ馴合ナリト言フト雖モ其馴合ノ証據ヲ舉ケタル事ナク又手附倍返シノ契約ハ通常爲シ得ヘキ契約ニシテ非常特別ノモノト論スルヲ得ス依テ原裁判所カ上告人ニ金五百圓ヲ賠償スヘシト判決セシハ不法ニアラス

判決

右辨明ノ如クナルヲ以テ本上告ハ受理スヘキ理由ナシトス
 第四百十八號

○地所受戻一件上告ノ判文明治十七年一月廿八日上告
 年三月廿七日申渡

山梨縣甲斐國西山梨郡清田

村平民

上告人

荻原 義 衛

同縣同國同郡太田町平民

右代人

青木 三左衛門

同縣同國同郡清田村平民

被上告人

中 澤 傳

本件ハ上告人ノ起訴ニ係ルモノナリ其訴趣ヲ釋スルニ上告人先代ニ於テ本訴論地曩ニ兩宮
 尙方ナル者ニ質入置タル未明治七年中之レテ受戻シ而テ被上告先代十左衛門ヘ特約ヲ以テ
 公証ヲ經ス相對質ニ差入レタルニ依リ今之テ受戻サント請求セシモノナリ被上告人カ之ヲ
 拒ムノ旨趣ハ論地ヲ相對質ニ取リトノフハアルヘキ筈ノコトニ非ラス又証據アルニ非ラス
 自分先代ハ兩宮尙方ヨリ之レヲ買得セリ依テ右請求シ應セストテ相爭モノナリ
 始審判事ハ地租徵收簿中明治七八年尙方カ持高ト上告人光高ノ持高トノ増減アルト明治九
 年ノ部上告人カ持高ニ論地ハ十左衛門^{被上告人}ノ部ニ登錄シ公証ヲ經サル質地云々記載アル
 ヲ探テ上告人先代ニ於テ尙方ヨリ受戻タル後被上告人先代ニ質入シタルモノトシ上告人ニ
 於テ論地ヲ受戻スヘキ旨判決セリ
 被上告人ハ右裁判ヲ不服ナリトシ控訴シタリ控訴判事ハ始審判事ト反對ノ裁判ヲ與ヘタリ
 依テ上告人ハ此裁判ヲ不當ナリト上告セリ其主點左ノ如シ
 一 契印モナキ甲第七號證ヲ採用サレシハ不當ナリトノコト

- 一 上告者カ論地ノ公租ヲ上納シタルヲ誤納ナリトサレシハ不當ナリトノコト
- 一 被上告者カ甲第一號證ヲ以テ論地ノ賣買ヲナセシト云テ有効ナリトサレシハ不當ナリトノコト
- 一 被上告者カ不筋ノ手續ヲ以テ受領セシ地券ヲ指テ論地所有ノ証トサレシハ不當ナリトノコト
- 一 上告第一二ノ兩號證ハ本訴ニ必要ノ證書ナルニ原裁判所カ必要ナラスト云去テ不問ニ措レシハ不當ナリトノコト

辨明

抑控訴裁判官カ本訴ヲ審判セシハ左ノ理由ニ依リシモノナリ

- 一 上告人^{控訴}被告カ論地ヲ他ノ尙方ヨリ受戻シタル証據ナキコト
- 一 當時質入規書入則公布アルニモ關テス質入証書ノ授受モナク相對質トナス譯ナキコト
- 一 被上告人カ論地ノ地券ヲ受ルニ上告人ハ何等ノ故障ナシタル証據ナク加之其後數ケ年受戻ノ着手モナサス等閑ニ付シ置タルコト
- 一 論地ノ公租明治七八十ノ三ケ年分上告人カ納メタルコトアルモ明治十一年以後ハ論地ノ公租ヲ被上告人ニ於テ納メタルヲ視レハ右七八十ノ三年分上告人カ納メタルハ誤納ナリトノコト

右ノ如ク論地ヲ上告人ヨリ被上告人ヘ入質セシコト無之事ノ原原由結果ヲ掲ケ而シテ被上告人カ其第一號證ノ如ク論地ヲ尙方ナル者ヨリ買受セシト云フコト本訴ノ事實ナリト認定セン

モノナルニ上告人ハ前顯主點ノ旨趣ヲ以テ縷々申立ルモ其第二三四ノ主點ハ原裁判官ト意見ヲ異ニスルト云フニ過ス其第一點ハ之レヲ一面ヨリ云ヘハ自分カ差出シタル乙六號証ノ貼紙ニハ契印アルニ之レヲ採用サレサリシハ不當ナリト云フモノナレモ甲七號乙六號共齊シシ公簿ナレハ契印ノ有無ノミヲ以テ其効力ノ差アルヘキニ非ス然ルニ右兩簿貼紙ノ事柄全ク反對ニ出ルヲ以テ原裁判官ハ本訴ヲ裁定スルノ材料トナラストシ兩カラ之採用セサリシモノナリ然レハ契印ナキモノヲ採タリト云フヲ得サルモノトス第二三四ノ點ノ如キハ上告人ハ原裁判官ト意見ヲ異ニスルト云フニ過キス第五點ニ於テ明治六年ヨリ十年迄ノ公租受取證ノ類地所取調帳ニ論地ヲ被上告人ノ名前ニ朱書改正セシモノ彙ニ尙方ニ買入シタル証文ノ塗抹セシモノヲ掲テ論スル處アルモ上告人カ論地ヲ尙方ヨリ受戻シ被上告人ニ相對質ニ差入タル証據ニ非ス又上告人カ地券ヲ受タル憑據アルニ非スシテ原認定ノ理由ヲ動カスヘキ効力ナキモノナレハ之ヲ以テ破毀ヲ求ムル因由トナスヲ得サルモノトス

判決

右辨明ノ如クナルヲ以テ原裁判ヲ可トシ上告受理セサルモノナリ

第四百十九號

○共有山地々券書換一件再上告ノ判全文

明治十七年二月廿三日上告
年三月廿七日申渡

愛知縣尾張國東春日井郡上
末村平民落合小平治同村平
民落合市左門衛代言人

上告人

東京府京橋區彌左衛門町一
番地寄留愛知縣士族

吉川守國

愛知縣尾張國東春日井郡上

末村三十九番地平民

落合嘉助

被上告人

外百五名

本訴ハ共有山林地々券名義書換約定履行一件ニシテ東京控訴裁判所ノ裁判ニ對スル再上告ナリ今茲ニ其顛末ヲ要約スルニ本訴起訴者タル被上告者ノ訴旨ハ其第一四號證ニ據テ所余山林地七町五反歩ノ内上告者名義ノ分ハ勿論右町歩ノ内嚮キニ上告者カ私擅ニ落合重左衛門ヘ賣却ノ分モ速ニ取戻シ被上告一軒共有ノ地券ニ改正スヘシ若シ又重左衛門ヘ賣却ノ分取戻シ行届カサルニ於テハ被上告第三號証ノ如ク賠償ヲ得ント云フニ在リ上告者ハ之ニ對シ所爭山林地ハ嚮キニ一旦被上告一軒ノ共有地ニ爲サンコトヲ約シタルモ其後破約トナレリ故ニ重左衛門ヘ賣渡シタルハ私擅ニ非ラス且被上告第一四號證ハ當時ノ代言人高力種英カ奸計ニ成立タルモノナレハ固ヨリ其効力ナシト答辨スルモノナリ第一終審應訴裁判所ハ右ノ爭訟ニ對シ被上告第一四號證ハ有効ニシテ且損害ノ償ハ上告者ニ於テ負擔スヘキモノナリト判決シタルニ其賠償ノ價額ニ至テハ上告者ヨリ落合重左衛門ヘ賣渡シタル山林地代價即チ金百五十圓ニ止ルモノト判定シタリ然ルニ兩造共ニ此裁判ヲ不當ナリトシ被上告者ハ

賠償價額ノ點ニ對シ上告者ハ其他ノ部分ニ對シ上告ヲ爲セリ本院ニ於テハ上告者カ上告ハ之ヲ却ケ被上告者ノ上告ハ之ヲ受理シテ原裁判ヲ破毀シ之ヲ東京控訴裁判所ニ移シタリ東京控訴裁判所ハ所爭山林地ノ内若干地ヲ重左衛門へ賣渡タルハ上告者カ私擅ノ所爲ナリト認定シ該地ヲ取戻スヲナラサル上ハ被上告第三號證即チ始審廳ヨリ村吏ニ命シタル見積直段中ヨリ原地價ヲ差引タル殘額ヲ以テ相當ノ賠償金ナリト定メ仍ホ上告者モ共有者ナレハ賠償金ヲ原被ノ戸數ニ平分シ上告者ノ得ヘキ分ヲ其中ヨリ差引キ殘額ヲ上告者ヨリ被上告者ニ償フヘキヲ命シタリ

上告者ハ右第二終審廳ノ裁判ヲ不法ナリトシ再上告ノ要旨ハ左ノ如シ

一原裁判カ落合重左衛門へ賣却シタルハ私擅ノ所爲ナリト判定シタルハ不法ナリトノ
二被上告第三號證ニハ現ニ(右原告落合善七落合幸三郎外百四名ノ者ヨリ私共依頼ヲ受ケ候ニ付見積リ方仕候)トアルニ原裁判所ハ始審廳ヨリ村吏ニ命シタル公クノ評價書ノ如ク判定シタルハ不法ナリトノ

三本訴山林ハ元來上末一村人民百六十餘名ニ對シ其共有ニ爲サント約シタルモノナリ而シテ被上告者百六名ハ取りモ直サス一村人民百六十餘名ノ共有惣代ナレハ本訴賠償金ノ如キハ即チ共有者百六十餘名ニ平分スヘキ等ナルニ原裁判所ハ原被ノ戸數ニ平分シ云々ト判決シタルハ不法ナリトノ

四原判文ニ(落合小平治代兼同人父落合市左衛門)トアレハ市左衛門ハ小平治ノ長男ナルニ斯ク父子相違ノ判文ヲ下付シタルハ不法ナリトノ

五上告者ハ被上告者ニ賠償セサルヲ得サルノ義務アリトスルモ我國賣買上一般ノ習慣ニ因リ地代金ノ一割乃至二割ヲ償フニ止リ被上告第三號證ノ如キ金額ヲ償フヘキノ理ヲシトノ

辨明

第一條 前第一二項ヲ審按スルニ原裁判所カ上告者ニ於テ所爭地ノ内若干地ヲ重左衛門へ賣渡シタルハ私擅ノ所爲ナリト判定シタルヲ及ヒ被上告第三號證ノ評價書ハ其公私ヲ論セス原裁判所ハ該評價ヲ以テ之ヲ相當ナリト思量シタルニ因ルモノニシテ共ニ事實上ノ認定ニ係ルヲ以テ之ヲ上告ノ理由トナスヲ得ス

第二條 前第三項ヲ審按スルニ被上告者百六名カ上末一村人民總代ノ資格ヲ以テ本訴ヲ起シタルニ非ルヲ原裁判所ニ呈供シタル兩造カ訴答狀ニ徴スルモ明白ナリトス長シ總代ノ資格ナリトスルモ上末一村人民ハ本訴兩造ノ數ニ比スレハ多數ナリ此多數ノ人頭ニ對シ本訴賠償金額ヲ平分スレハ上告者ノ得分ハ却テ原裁判ノ割合ヨリモ減少スル理ナリ然レハ則チ本項ノ申立ハ上告者自ラ其利益ヲ減セントスルモノナレハ一般ノ詞訟上即チ始終審上告ヲ問ハス如此ノ申立ハ之ヲ受理スヘキ限ニ在ラス

第三條 前第四項ヲ審按スルニ市左衛門カ果シテ小平治ノ長男ナラハ原判文ハ定メテ誤寫ナルヘシ如此ノハ原裁判所へ其改正ヲ求ムルモ亦可ナリトス且ツ此事タル毫モ本訴ノ爭點ニ關係ナキヲ以テ之ヲ上告ノ理由トスルヲ得ス

第四條 前第五項ヲ審按スルニ共有者ノ承諾ヲ經ス私擅ニ他賣シタル物件ヲ取戻スヲ

得シテ其共有者ニ對シ價ヲ爲スハ其物件適當ノ價額ヲ償フヘキモノトス而シテ上告者
カ申立ル如キ賣買代價ノ一割乃至二割ヲ償フニ止ルトノ習慣アルコトハ之ヲ認ルコト得ス
右辨明ノ如クナルヲ以テ本上告ハ受理セザルモノ也
第百五十號

○精算金催促一件上告ノ判文 明治十五年十二月十二日上告
全 十七年三月廿七日申渡

兵庫縣但馬國城崎郡上山村
平民

上告人

岩本佐太郎

同縣同國同郡大篠岡村平民

被上告人

細田市右衛門

外四名

本件ハ精算金催促事件ニシテ大坂控訴裁判所ノ裁判ヲ不法トシ明治十五年十二月十二日本
院ニ上告及フモノナリ而シテ上告人ハ明治十六年四月廿三日實母病氣ノ旨コト歸省願出同
年七月三十日本院ニ出頭スヘキ段申立ルニ付其旨聞届タルモ其期日出頭セス其後七月三十
一日附全年九月十八日附及全年十一月十一日附ヲ以テ出頭延期申立然ルモ其期日出頭セサ
ルヲ以テ更ニ明治十七年一月廿五日附ヲ以テ全年二月二十日迄ニ必ス出京本院へ出頭スヘ
シ若シ同日迄ニ本人又ハ代人代言人トモ出頭セサルニ於テハ上告ノ權利ヲ拋棄セシモノト
見做シ處分スル旨ノ通達方ヲ所轄郡役所へ照會セシコト上告人ハ所在不分明ナル趣ヲ以上告

者實弟某ヨリ戶長役場ニ届出タル書面ノ寫并ニ右ノ段戶長ヨリ郡長ニ差出セシ書面ノ寫ヲ
添テ郡役所ヨリ回答アリ

右ノ事情ニヨリ上告人ハ自ラ上告ノ權利ヲ拋棄シタルモノトシ上告狀受理セサルモノナリ
第百五十一號

○貸金催促一件上告ノ判文 明治十六年二月十三日上告
全 十七年三月廿八日申渡

石川縣加賀國石川郡小柳村
平民

上告人

中山市右衛門

東京府日本橋區小網町四丁

目二番地同府平民

右代言人

大原鎌三郎

石川縣加賀國金澤區荒町二

丁目二十三番地共眞社總代

士族

被上告人

野村吉六
大矢八郎

東京府麴町區有樂町三丁目

一番地平民

右代言人

貸金催促ノ訴大坂控訴裁判所ノ判決ヲ不當トスル上告ノ要領左ノ如シ

第一條

本訴歸着ノ要點ハ唯一アル耳何ソヤ曰ク上告第一號證ハ被上告人ノ紛失セルヲ上告人ニ於テ拾ヒ取リシモノ歟將タ上告人ニ於テ元利清濟ヲ遂ケタルニ因テ其手裏ニ入りシモノ乎此ナリ

被上告人ニ於テ上告第一號證ハ上告人ヨリ元利金ヲ返濟シタルニ因テ差戻シタルモノニアラス紛失シタルモノナリト申立ルト雖モ果シテ之ヲ紛失シタリト爲スノ証據ハ何ソヤ上告人ハ其絶テ之レヲキチ知ルナリ凡ソ義務ノ証書ナル者ハ其義務ヲ盡了スルニアラサレハ決シテ義務者ノ手ニ入ルヘキモノニアラス故ニ其義務ノ証書若シ義務者ノ手ニ返リ居ルキハ他ニ其証據アルヲ俟タスシテ權利者其義務ヲ得タル者ト爲ス固ヨリ至當ノ推測ナリ而ルニ被上告人ニ於テ上告第一號證ハ紛失シテ義務者ノ手ニ落ナタルモノト云フモ此レ全ク口頭ノ陳述ニ止マリ果シテ義務ヲ得タルニアラスト推測スヘキ反對ノ証據ナシ此レヲモ之レ願スシテ原裁判所ハ輒ク被上告人カ口頭ノ陳述ヲ採用シテ事理至當ノ推測ヲ排斥ス不當ノ一ナリ

原裁判所ハ上告番外第一二號證ヲ以テ紛失ノ証據ト爲スモノ、如シ何ソ其レ誤レルノ甚シキヤ其一號證ハ何ソヤ被上告人カ警察署ニ出シタル紛失届ナリ上告人ハ之ニ與ラス惡シ之ヲ關知セサル上告人ニ對シテ証據ノ効アルヘケンヤ又其二號證ナル者ハ被上告人カ

戸長役場ニ出シタル消印差止ノ願書ニシテ同シク上告人ノ知ル所ニアラス則チ上告人ニ

對シテハ一片ノ反古ニ過キサルモノナリ而ルニ原判文ヲ閱スルニ「被告第六七號證」上

番外第一」ノ如ク其筋ハ夫々届出ヲナシ置キタルモノナレハ「中」其金額ハ返還受ケタル

二號證」モノニアラサルトノ言ハ頗ル信ヲ置クニ足ル」云々トアリ此レ即チ被上告人カ呈供セル

反古ヲ探テ確証ト爲シタルモノ其不當ニナリ

被上告人ニ於テ上告第一號證ヲ紛失シタリト云フモ其言素ト捏造ニ係ルヲ以テ前後符合

セサル者甚タ多シ今其一ニチ掲クレハ上告番外第一號證ニハ「三月十一日原告方へ出張

スル途中ニテ紛失致候」トアリ同シク第二號證ニハ「原告方へ罷越候戻リ途中ニテ誤テ該

証書見當不申紛失致候モ難計御座候」ト云ヒ又控訴答辨書第一條ニハ原告ノ宅ニ於テ紛

失シ」ト云ヒ詐辨百出孰モ無証據ナル口頭ノ陳述トハ云ヘ斯ク前後不揃ナルニ於テハ愈

以テ信スヘカラス原裁判所ノ審理不盡ナル毫モ此等ニ就テ觀察スル所ナシ其不當ニナリ

第二條

原判文ニ云ハク上告第一號證ハ戸長ノ公証ヲ經タル者ナレハ返金ノ際之ヲ消印セサルヘ

カラサルニ「其現ニ依然トシテ消印シナキハ甚怪マサルヲ得ス」中果シテ本訴ノ金額ヲ

返辨ナシタレハ被告於テ何ソ戸長役場へ消印見合ノ儀ヲ出願スルノ道理アラシヤ」ト鳴

呼此レ何ノ言ツ試ニ思ヘ茲ニ甲ナル者アリ乙者ヲ相手取り貸金催促ノ訴ヲ爲サンニ乙者

ハ既ニ其義務ヲ盡了シタリト答辨ス此ニ於テ法官之ヲ斷シ「果シテ本訴ノ金ヲ返辨ナシ

タレハ甲者於テ何ソ裁判所ニ訴へ出ツルノ道理アラシヤ」ト云ハ、原裁判所ハ此辨明ヲ

至當ト爲ス歟今原判文ノ「何ソノ戸長役場へ消印見合ノ儀」云々ハ何ヲ以テカ之ト分クン實
 ニ不法ナリト云フヘシ且ツ夫レ原裁判所ハ故テ「怪ム」ニ足ラサルノ事ヲ怪ム實ニ其甚タ
 シキニ至ル者アリ抑モ石川縣下一般戸長役場ノ慣行ハ姑シ措キ上告人居村ノ役場ニ於テ
 ハ公証ノ消印ヲ請フニ債主ノ立會ヲ必要トセス若シ本証ヲ携帶シテ之ヲ請フキハ債主
 一名ニテモ完済ノ證據明白ナリトシテ直ニ開届ケ消印サル、コト上告第三號役場ノ保証
 ニ由テ判然タリ若シ此消印ノ事ハ雙方立會ニアラサレハ爲スヘカラサルモノナランニハ
 上告第一號証其消印ナキハ少シ疑ヲ容ル、ニ足ルヘシト雖モ其立會ヲ要セサルコト斯
 ク分明ナルニ於テハ消印アルトナキト本訴ニ於テ何ノ關係カ之レアラシヤ殊ニ被上告人
 ハ不正ニモ本訴ヲ起スニ先チ上告番外第二號証ノ如ク戸長役場ニ出頭シテ消印ヲ差拒ミ
 タルニアラスヤ必竟スルニ本訴ノ要點ハ被上告人ニ於テ全ク上告第一號証ヲ紛失シタル
 歟否ノ一點ニ過キスシテ消印云々ノ如キハ實ニ之カ枝葉タリ而ルニ先ツ其枝葉ヲ執テ不
 當ノ觀察ヲ下シ以テ其根本ニ至テ被上告人カ無證據ナル口頭ノ陳述ヲ採用ス審理不盡ノ
 甚シキ其不當四ナリ

原判文ニ云ハク「素ト原告ト鉄三郎トハ親子ノ間柄ナルニ其買取ベキ金員アラハ何ソノ抵
 當品ヲ公賣ニ付スルノ理アルアラシヤ」ト是亦裁判ノ實情ヲ得サルモノナリ何トナレハ
 上告人ハ齡既ニ高ク且ツ虛弱ナルヲ以テ家事ハ學テ長男鉄三郎ニ委任シアリ故ニ當時金
 ニ差支ヘタルハ上告人ト鉄三郎ト同シシ差支ヘタル譯ニテ上告人カ不得已抵當品ヲ公賣
 ニ付シ鉄三郎カ入札ヲ爲セシハ全ク鉄三郎ニ餘裕アリテ然ルニアラス其實殘酷無情ナル

債主ヲシテ當時其督責ヲ止メシムルカ爲ニ態ト此手數ニ及ヒシモノナリ

又原判文ニ云ハク「果シテ本訴ノ義務ヲ盡シタルモノナラハ必ス勸解廳へ原被連署ノ
 上之カ濟口証ヲ呈出セサルヘカラサルニ」云々上告人念フニ凡ソ勸解ノ濟口書ハ權理者
 一人ニテ事ノ濟ミタルヲ申立テ願書ヲ取り下ルノ例モアリ亦双方連署スルノ例モアリテ
 要スルニ一定ノ成規アルニアラス今原裁判所ノ言フカ如クナレハ必ス双方ノ連署アルヲ
 要スルノ成規ナルカ如シ上告人ハ決シテ之ヲ信セサルナリ良シ假リニ此成規アリト爲ス
 モ上告人カ之ヲ必付カサリシハ單ニ勸解手續上ノ怠リニ止マリ此ヲ以テ被上告人カ証書
 ヲ紛失シタルノ証ト爲スヘカラサルハ敢テ辨スルニ及ハス且ツ夫レ上告番外第三號証召
 喚狀ノ寫ナル者ハ上告人ニ於テ曾テ受取りタル覺ナキノミナラス其日付ハ三月十日ニシ
 テ則チ金員受渡ノ前日ナレハ毫モ是ヲ以テ三月十一日ニ完済ノ事實ナキコトヲ証スルニ
 足ラス而ルニ原判文ニ「三月十一日ニ元利金皆済シタルニ其以後召喚狀ヲ受クヘキノ筈
 ナケレハナリ」云々ト恰モ十一日後ニ之ヲ受取りタルモノ、如ク且ツ其日附ニ必付カス
 シテ漫然採テ本訴ノ証ト爲サレタルハ抑モ此レ審理不盡ノ最モ甚クシキ者ニアラスシテ
 何ソヤ其不當ナル五ナリ

第三條

被上告人ハ又三月十一日ニ於テ上告人長男鉄三郎ヨリ金五圓ノ代品トシテ焚炭拾俵ヲ受
 取リタルコトヲ自認セリ而シテ其言ニ云ハク「三月十一日示談ノ上被上告人ニ於テ四月
 五日マテ期ヲ緩ウシ上告人ニ於テ中勘金」此レハ方言ト見エテ其意義ハ上」拾五圓差出ス
 告代官ハモ確知セサル所ナリ

へキ約定ヲ爲セリ尤モ内五圓ハ即坐ニ受取リ拾圓ハ全月十五日ニ受取ル等ニテ歸途ニ上
 リ一里餘モ歩シタル時鉄三郎後ヨリ追來リ其拾圓モ即時ニ渡スヘシトテ頻リニ奔走シ遂
 ニ夜ニ入テ金澤ニ至リ某ノ家ニテ炭拾俵借出シ之ヲ五圓ノ代品トシテ被上告人ニ渡シ殘
 リ五圓ハ必ス十五日ニ渡スヘシ若シ違約セハ既ニ渡シタル拾圓ハ上告人ノ損毛タルヘシ
 ト約定シテ其日ハ立分レタリ云々」嗚呼此レ何等ノ妄言ソ果シテ被上告人ノ云フカ如ク
 ナレハ即金五圓渡シテ其日ハ事ノ濟ミタルニアラスヤ而ルニ債主ヲ尾シテ強サレサル
 ノ勞ヲ求ム此レ其虛妄ナル証ノ一ナリ自ラ好テ勞ヲ求メ夜ニ入テ四里ニ餘レル道ヲ金澤
 ニ至ル此レ其ニナリ既ニ自ラ債主ノ爲メニ此ノ一方ナラサル勞ヲ厭ハサルカ上ニ尙ホ己
 レニ尤モ不利ナル違約云々ノ約定ヲ爲ス此レ其ニナリ是等ノ事實ヲ觀ルモ被上告人ノ不
 當ナル知ルヘキナリ

被上告者ハ上告ノ不當ナルヲ論シ原裁判ヲ辨讓シタリ

判決

上告第一號証ノ金額ハ果シテ之ヲ完済セシモノナレハ該証ハ戸長役場ノ公証アル者ナレハ
 之ヲ取消ノ手續ヲ爲サ、ルヘカラス假令ヒ上告第三號証ノ如クナルモ上告者ニ於テ空ク之
 ヲ放任シ置クヘキ情理ナシ況ヤ完済ノ翌日被上告者カ証書ノ紛失ヲ辞柄トシ公証消込差止
 ヲ申立タル者トセハ上告者カ之ヲ黙止スヘキノ理由ナキニ於テチヤ又上告者カ完済シタリ
 ト云フ明治十五年三月十一日ノ頃ハ勸解中ニ係リ上告番外第三號証ノ通り其應ノ召喚ヲ受
 ケ居ルモノナレハ其濟口証ヲ呈セサルノ謂レアラサルナリ且鉄三郎ナル者ハ上告者カ同居

ノ長男ニシテ上告者ハ年齢既ニ高シ且虛弱ナルコヨリ家事ハ擧テ委任セリト自ラ供認スル
 所ナリ而テ上告者カ其負債ヲ償却シ得サルニ鉄三郎カ之ヲ償却シ得ヘキ理由モアラサルナ
 リ
 夫レ如斯事迹ニ據リ推測テ下セハ上告第一號証ノ金額ヲ當時完済セシモノト信認シ得サル
 ハ當然ナリ既ニ之ヲ完済セシモノト信認シ得サル上ハ上告第一號証ノ上告者カ手ニ在ルモ
 被上告者カ本訴貸金ノ完済ヲ受ケタルカ故ニ上告者へ還付セシ者ト看做スヲ得ヌ因テ原裁
 判所於テ本訴上告第一號証ノ義務ハ未タ盡了セサル者トシ控訴ノ旨趣ヲ斥ケタルハ不當ノ
 裁判ト云フヲ得ヌ但上告者ハ此他申立ル所アルモ主要ノ點ニアラサルヲ以テ破毀ノ資料ト
 爲スニ足ラス

右ノ理由ナルヲ以テ大坂控訴裁判所ニ於テ言渡シタル裁判ハ破毀セサル者也
 但上告入費ハ上告者ニ於テ負擔スヘシ

第百五十二號

○共有山働場故障取除一件上告ノ判文
 明治十六年八月廿四日上告
 全 十七年三月廿八日申渡

廣島縣安藝國佐伯郡坪井村

平民橋本玉吉外百三十一名

代言人

東京府神田區一ツ橋通町二

十番地寄留群馬縣士族

上告人

六七〇

廣 瀬 帆 三

被上告

千 同 村

廣島縣安藝國佐伯郡

本訴ハ共有山働場故障解除ノ一件ニシテ廣島控訴裁判所ノ裁判ニ對スル上告ナリ
本訴起訴者ハ被上告村ニシテ其第一號証ニ據リ上告村地籍内ニ在ル字樟子岩椋木ノ二山ヘ
入會セントスルニ在リ上告村ハ之ニ對シ被上告第一號証ハ恩惠上ヨリ申遣シタル書面ナリ
然シテ論山ハ古來上告一村限リノ野山ニシテ兼テ兩村入會ノ慣例アルコトナシト云ヒ之ヲ証
スルニ其第一號証ヲ以テスルモノナリ

上告者ハ始終審共ニ敗訴トナレリ而シテ原裁判即チ終審廳ハ上告第一號証ニ被上告村ヨリ
入會ノコトハ記掲ナリ又從來被上告村ヨリ入會筋ノ契約証ナシト雖モ既ニ上告村ハ被上告村
ヘ被上告第一號証等ヲ送り其文中入山ノコトヲ明言シタルニ據レハ論山ヘ被上告村カ入會シ
來タルコト知ルニ足レリ云々トノ判決ヲ與ヘタリ今ヤ上告村カ右ノ判決ニ對シ上告ノ要旨左
ノ如シ

一論山カ上告一村限リノ共有野山ナルコトハ上告第一號証ノ如シ而シテ被上告第一號証ハ
隣村ノ交誼ヲ以テ恩惠ニ因リ論山ノ落葉拾取柴草筋取等ノ一部ヲ特別ニ許シタルモノ
ナリ然ルニ原裁判所ハ共有ナリヤ否ヲ判定セス直ニ被上告第一號証等ヲ採テ妄リコ入
會權アル者ト斷定シタルハ不法ナリトコト
右上告要旨及ヒ原裁判ヲ審按シテ左ノ辨明ヲ與フ

第一條 原裁判ハ兩造ノ証據ヲ審按シ被上告第一號証ニ據リ被上告村カ論山ヘ入會シ來
リタルノ事實ノ認定シタルモノナリ故ニ今ヤ上告者ニ於テ自己ノ意見ヲ以テ兩造証據ノ
効力如何ヲ論スルモ此ノ如キハ即チ原裁判所カ事實認定ノ當否ニ對シ之ヲ論争スルモノ
ナルヲ以テ上告ノ理由トナスコトヲ得ス

第二條 上告者ハ原裁判所カ論山カ兩村共有ナリヤ否ヲ判セス直ニ被上告第一號証等ニ
據リ被上告村ハ論山ニ入會權アル者ト斷定シタルハ不法ナリト云フト雖モ所有ト入會ト
ハ固ト殊別ノ事項ニ屬ス故ニ所有ヲ判セサルモ入會ヲ判スルノ障礙トナルコト無キヲ得ヘ
シ

以上辨明ノ如クナルヲ以テ本上告ハ受理セサルモノ也
第百五十三號

○金錄公債証書記名書換一件上告ノ判文
明治十六年九月四日上告
全十七年三月廿八日申渡

東京府赤坂區青山南町五丁

目十八番地士族

阿 部 重 嘉

同府京橋區瀧山町十一番地

寄留福岡縣士族

武 藤 浪 重

同府京橋區本港町一丁目十

六七二

右代官人

被上告者

六番地平民

田中加茂吉

同府京橋區水谷町十番地士

族

中村峻也

右代言人

上告ノ要領ハ左ノ如シ

夫レ本案ハ被上告者カ上告者ニ對シ上告者所有ノ公債証書記名書換ヲ求メ得ルヤ否ノ所
 論ニ止マルモノナレハ既ニ原裁判狀ニモ掲載セラル、カ如シ被告被上告者カ其甲第一號
 証ノ抵當物即チ公債証書記名ヲ原告〔上告者〕ニシテ直チニ書換セシメントノ請求モ又々
 甚タ其當ヲ得サルモノトス何トナレハ凡ソ物件抵當ノ貸金ニ付其返済滯滞ノ時ハ先以テ
 抵當物ヲ賣却シ其代價ヲ以テ返金ニ抵テ不足アラハ其殘金ヲ求メ餘金アレハ之レヲ返ス
 ト云フカ普通ノ定則ニシテ其抵當物ヲ直チニ淹滞金ノ代物トシ其所有權ヲ債主ヘ移スヘ
 キモノニアラサレハナリトアリテ被上告者請求ノ不當ナルコトハ原裁判所モ之レヲ認メ
 テ以テ前文ノ如キ裁判ヲ下サレタルヤ知ルヘキナリ然レハ則チ本案被上告者ノ請求ハ悉
 シ排斥セラレタルモノナルニ其末段ニ至リ畢竟重次カ被告ニ對スル返金ノ資力ナキ場合
 ニ於テハ被告ハ其抵當物所有主タル原告ヘ代價ヲ求ムルニ止マリ又々原告ハ其求メニ應
 シ若シ金子調達シ能ハサルキハ該抵當ノ公債証書ヲ賣却シテ代價金額ニ充ル迄ノ義務ハ
 免カルヘカラサルモノト決了ス〕ト本案範圍外ニ出テタル裁判ヲ與ヘラレタルハ最モ不

當ト謂ハサルヲ得ス何トナレハ上告者ハ素ヨリ吉田重次ニ公債証書ヲ貸與スルト雖モ重
 次ト被上告者トノ貸借ニ對シ其金額ニ充ルノ代價ヲ爲ストノ約束ナケレハナリ故ニ若シ
 モ重次カ該借金ノ償却ヲ爲シ能ハサル場合ニ於テハ該抵當物ヲ以テ之レカ償却ニ充ツル
 ハ格別若干金額ニ充ル迄ノ代價ヲ爲スヘシトノコト迄立入ラレタルハ其權限ヲ侵カサシ
 メタル而已ナラス前後矛盾セル不當ノ裁判ナリト云フニ在リ
 被告上者ハ原裁判所ノ裁判ヲ辨護シ上告ノ理由ナキ旨ヲ答辨セリ

判決

負債者吉田重次ノ爲メ單ニ抵當物即公債証書而已ヲ貸與シタル者ナレハ其抵當物ノ賣却代
 價ニ至ル迄ハ代價ノ義務ヲ任セサル可ラサルモノナリト雖モ其以外ニ渉ル迄ノ義務ヲ負フ
 ヘキ者ニアラサルハ固ヨリ條理ノ當ニ然ルヘキモノナリ然ルチ原裁判所ハ竟畢重次カ被告
 ニ對スル返金ノ資力ナキ場合ニ於テハ被告ハ其抵當物所有主タル原告ヘ代價ヲ求ムルニ止
 マリ又原告ハ其求メニ應シ若シ金子調達シ能ハサルキハ該抵當ノ公債証書ヲ賣却シテ代價
 金額ニ充ル迄ノ義務ハ免カル可ラサル者ト言渡シタルハ條理ニ背キタル不當ノ裁判ナリ
 右ノ理由ナルチ以テ東京控訴裁判所カ本案ニ渡シ言渡シタル裁判ヲ破毀シ更ニ適當ノ裁判
 ヲ受ケシムル爲メ名古屋控訴裁判所ニ移スモノナリ
 但上告入費ハ被上告者ノ負擔タルヘシ

第五百五十四號

○地所引渡約定履行上告ノ判文明治十七年二月廿二日上告
 年三月廿八日申渡

栃木縣下野國足利郡高橋村

平民

上告人

新井源藏

東京府神田區今川小路二丁

目十五番地平民

右代言人

志摩萬次郎

栃木縣下野國足利郡高橋村

平民

被告上告人

佐取空三郎

本件ハ被告上告人ノ起訴ニ係ルモノナリ其訴旨タル論地ハ自分ノ所有地ナルヲ他ノ龜右衛門ナルモノ之ヲ冒認シテ被告上告人方ニ質入シタルモノナルニ依リ之ヲ取戻度ヨリ其筋ニ出願中上告人ヨリ甲第一號ノ約定証ヲ受取タルニ依リ此約定ノ義務ヲ得ント云ニアリ右約定証ノ明文中(今般貴殿被上告人ヲ指ヨリ地所引渡出願ニ被及更ニ示談ノ上右龜右衛門貸金貴殿ヨリ御渡相成候ハ、右田地貴殿方へ金子引替御返地可仕候爲後日如件)トアリ上告人ハ右約定書ヲ差入タル覺無之ニ付其請求ニハ難應ト拒ムモノナリ被告上告人ハ栃木始審裁判所ニ於テ取訴シ之ヲ不服ナリトテ東京控訴裁判所ニ控訴シタリ

此控訴ニ對シ東京控訴裁判所ハ本訴ヲ審理スルハ甲第一號ノ眞偽如何ノ一點ニアリトシ而シテ上告人控訴カ記名調印セシ紙ヲ被告上告原告ニ渡シタリトノ申立ハ其道理ナキ理由ヲ示

シ又上告人カ被告上告人へ對シ偽証ノ告訴ヲ爲セシモ被告上告人ハ免訴トナリタル事跡ヲ考ヘ又別ニ該証ノ偽造ナル憑証ナキヲ以テ有効ノ証ナリト認定シ上告人ハ該約定ヲ履行スヘキ旨申渡タリ

上告人ニ於テ此控訴裁判ヲ不法ナリトシ破毀ヲ求ムル上告ノ主點左ノ如シ

被告上告甲第一號証ヲ眞正ニ成立タルモノトサレシハ不當ナリトノ事

右主點ト上告狀ヲ併セ之ヲ審按スルニ上告人ノ申立ハ甲第一號証書ニ付原裁判官ノ認定ニ對スルモノニシテ前顯認定ノ理由ヲ動カスノ力無之只該証ニ對シ自分ハ觀察ヲ異ニスト云ニ外ナラスシテ破毀ヲ求ムル因由トナスヲ得サルモノトス

右ノ理由ニ依リ原裁判ヲ可トシ本上告ヲ受理セス

第百五十五號

○字高谷山山地所有權引直シ一件上告ノ判文

明治十七年三月五日上告

全 年三月廿八日申渡

大坂府大和國宇知郡岡村近

内村居傳村久留野村總代兼

近内村平民

藤岡長一郎

上告

同總代兼岡村平民

今田芳造

同

東京府京橋區加賀町十六番

六七五

地主族

鳩山和夫

大坂府大和國宇智郡

北山村

右代言人

本件ハ宇高名山所有權引直ノ訴ニシテ名古屋控訴裁判所ノ裁判ニ對スル再上告ナリ而シテ
兩造カ諸証中其尤モ緊要ナルモノハ被上告者カ爲メニハ其第三四號証上告者カ爲メニハ其
第三四號証上告者カ爲メニハ其第十號証是ナリ

原裁判所ハ上告第十號証第一項乃至第十項前段迄ノ規定ハ論山ノ所有權ニ關セシモノトハ
認メ難シ已ニ所有權ニ關セシモノニ非サル以上ハ其末段ニ是迄何様ノ書類云々トアルモ箇
ハ所有權ニ關セシ書類ヲ指シタルニ非ラスシテ特ニ該規則ノミニ關セル書類ヲ指セシモノ
ト認メサルヲ得ス其他上告數証ヲ閱スルニ其地券受ニ關スル書類ヲ除ク外ハ間接ノ証若
クハ無印ノ書類又ハ捺取ノミニ關シタル書類ニシテ果シテ論山ノ原被共有ニ係ルヲ認ム
ルニ足ルモノナシ之ニ反シ被上告第三四號証ハ論山カ被上告一邸ノ共有山ナルコト判定ア
リシ直接ノ証タルノミナラス猶被上告數証ノ其事實ヲ補助スルアリテ他ニ之ニ反スル証左
ノ見ルヘキナク而シテ遽カニ論山ヲ原被ノ共有ト爲スヘキ理由ノ端緒タモ見サレハ竊ニ之
ヲ原被共有ノコトニ申稟シタルハ全ク過誤ニ出テタルモノト認定スト判決シタリ
今ヤ上告者ハ右ノ判決ニ對シ上告ノ要旨ハ左ノ如シ

一原裁判所カ上告第十號証ハ論山ノ所有權ニ關セシモノト認メ難シトノ判決ハ不當ノ解

釋ナリトノコト(上告狀第二條)

二上告第十號証第一項ニ北山村外五ヶ村共都合六ヶ村立會ナリト明記シタルハ論山カ原
被告ノ共有ナルコト明カナリトノコト(上告狀第三條)

三上告第一二六七八九號証第十三十四十五十八號各証ニ據レハ被上告第三四號ハ單ニ論
山ノ所屬丈ヲ定メタルモノナリトノコト(上告狀第四條)

辨明

上告要旨ヲ審按スルニ其第一項ハ証書解釋方ノ不當ヲ訴ルモノナリ其第二三項ハ上告各証
ニ對シ上告者カ自己ノ意見ヲ陳スル迄ノモノニシテ共ニ控訴上告手續第十條ニ適セサルヲ
以テ本上告ハ受理セサル者也

第五百五十六號

○實地畑受戻一件上告ノ判文明治十六年五月卅一日上告
明治十七年三月卅一日申渡

埼玉縣武藏國榛澤郡小前田

村百四十五番地平民

田 邊 榮 五 郎

東京府京橋區京橋水谷町十

番地主族

中 村 峻 也

埼玉縣武藏國榛澤郡小前田

六七七

右代言人

村百四十八番地平民田邊清
作總理代人同村百四十九番
地平民

被上告人

田邊 力 藏

本件ハ質地畑受戻ノ訴ニシテ東京控訴裁判所ノ裁判ニ對スル上告ナリ
本件ノ起訴者ハ被上告者ニシシ其第一二號証ニ據リ本人清作カ先代善五郎ヨリ買入シタル
畑地受戻ヲ要求スルモノナリ上告者ハ該地ヲ返戻スヘキノ義務アルコトハ素ヨリ其認知スル
所ナルモ清作ハ亡善五郎ノ正當ナル跡相續者ト認メサルヲ以テ右ノ要求ニ應ジカタシト拒
辨スルモノナリ

原裁判所ハ被上告第十五號証ニ據レハ上告者ハ清作カ亡善五郎ノ相續者トナリシコトヲ認知
シ而シテ論地ノ地券ヲ清作ニ名受セシムルコトヲ肯諾シタルモノナレハ今更清作ハ亡善五郎
ノ相續者ニアラスト云フヲ得ヌ云々ノ理由ヲ以テ上告者ハ被上告要求ノ通り速ニ返地スヘ
キノ裁判ヲ與ヘタリ
上告者カ右ノ原裁判ニ對シ上告ヲ爲ス要旨左ノ如シ

第一條

清作カ亡善五郎ノ相續者トナリ論地ノ地券ヲ受タル成跡ノミヨ注目シ其原因如何ヲ願ミ
ス甲第十五號証ニ據リ正當ニ相續テナセシモノ、如ク裁判セシハ明治八年第百三號公布
第三條ニ背キタル裁判ナリトノコト

第二條

明治六年ハ明治五年第百三十三號公布ヲ以テ姓名ノ改稱ヲ禁セラレタル後ナレハ其手
續ヲ尽サス改名セシ清作ハ法律ヲ遵奉セサルモノナルニ却テ法律ノ保護ヲ受ケシメタル
裁判ハ違法ナリトノコト

第三條

甲第九號甲第十四號戸籍ノ如キハ原因ナクシテ成立タル者ニシテ無効ナル不真正ノ戸籍
ニ對シ反証ヲ舉示スルノ責ナキ理ナルニ上告者カ口頭ノ申立ニシテ據ルヘキノ確証ナシ
トハ不法ナリトノコト

辨明

本訴ノ要點ハ被上告本人清作ハ果シテ亡善五郎ノ正當ナル跡相續人ナリヤ否ヤニ在リ然
シテ原裁判ハ被上告第十五號証ニ據リ上告者ハ清作カ亡善五郎ノ相續者トナリシコトヲ認
知シ而シテ論地ノ地券ヲ清作ニ名受ケセシメタルコトヲ肯諾シタルモノ即チ清作カ亡善五
郎ノ跡相續者ナリト認メタル事實上ノ判定ニ係ルヲ以テ此裁判ニ對シテハ上告スルノ理
由ナキモノトス

上告要旨第二三條ヲ審案スルニ被上告本人カ改名ノ法律ニ違フ否トハ被上告本人カ實際
亡善五郎ノ相續者ナリヤ否ニ關係ナク又原裁判所ハ已ニ被上告第十五號証ニ據リ被上告
本人ハ亡善五郎ノ相續者ナリト認定シタルヲ以テ被上告第九第十四號証ニ對シ上告者ニ
舉証ノ責任ヲ負ハシメタルハ不法ニアラストス

右辯明ノ如クナルヲ以テ本上告ハ受理セサルモノナリ
第百五十七號

○登養子離別一件上告判文明治十六年十一月廿四日上告
明治十七年三月三十一日申渡

千葉縣下總國印旛郡太田村
八十三番地平民和田俊太郎
養母和田トメ代人
同縣同國同郡山梨村六十三
番地平民

上告人

齋 藤 新 七
右和田俊太郎妻和田ヨシ代
人

同縣同國千葉郡千葉町百十
四番地平民

同

川 村 利 敬
同縣同國印旛郡太田村八十
三番地平民

被上告人

和田 俊 太郎
同縣同國同郡同村廿九番地

平民和田俊太郎實兄

同

本件ハ上告人ノ起訴ニ係ルモノナリ其訴旨ハ養子俊太郎〔明治十二年和田家ニ入籍同十三
十六年一月和田家〕ヲ離別セント求ムルモノナリ被上告俊太郎等ハ離別ヲ受ル原因ナシト
拒ムモノナリ

千葉始審裁判所ハ此詞訟ニ對シ原告ハ不孝ヲ鳴ラシ被告ハ不慈ヲ責メ共ニ剴切ナルヲ見レ
ハ云々調和ノ手段ナキ場合ニ立至タル者ト認定セサルヲ得ストシ速ニ離別スヘキ旨申渡タ
リ

被上告俊太郎等ハ此裁判ヲ不服ナリトシ控訴シタリ
此控訴ニ對シ東京控訴裁判官ハ左ノ旨趣ノ裁判ヲ與タリ

離別ノ理由トシテ論証スル要旨ハ左ノ三點ナリトス第一原告俊太郎ハ被告「ヨシ」俊太
郎ヲ嫌惡スルトノコト第二俊太郎ハ被告「トメ」〔俊太郎〕ノ教戒ニ從ハサルトノコト第三俊
太郎ハ生家ニアリテ養家ヘ立戻ラサルトノコト
右第一點嫌惡スルノ所爲ハ被告「上告」之ヲ指摘セサレハ其事實ノ見認ルニ由ナキヲ以テ
離別ノ理由トナスヲ得ス

右第二點ニ付被告ノ證據トスル甲第四號ハ其教戒ニ從ハサルノ証トナラズ是亦離別ノ
理由ト云テ得ス

第三點ニ付被告ノ證據甲第五號ハ原告カ養家ニ立戻サルノ証トナスヲ得サルニ付離別

ノ原由ト云テ得ス尙被告ハ甲第二號証ヲ提供スルモ該証明ハ他ニ依據スヘキ傍証ナク且其文中信據シ難キモノアリ却テ原告乙第一號和田家親戚和田定右衛門外數名ノ保証書アルヲ以被告[養母等即]請求不相立ト申渡タリ

上告人等カ右裁判ヲ不法ナリトシ上告シテ被毀ヲ求ムル要領左ノ如シ

一被上告人俊太郎カ「ヨシ」ヲ嫌惡スル証ハ甲第二號親族媒灼人等ノ保証アリトノリ

一俊太郎カ「トメ」ノ教戒ニ從ハサルノ証據ハ甲第四號証アリトノリ

一甲第四號五號証ニ對シ偏頗誤解ノ解釋ヲ下サレシトノリ

大審院ニ於テ辨明判決スルヲ左ノ如シ

甲第二四五號ノ三証ニ付原裁判官ハ一々其説明ヲ下シ本訴ヲ証據トナラサル所以ヲ示シタリ之ニ對シ上告人ハ前要領ノ旨趣ヲ以テ縷々申立ルモ畢竟証書解釋ニ付原裁判官ト見解ヲ異ニスト云ニ過スシテ破毀ヲ求ムルノ因由トナスヲ得サルモノトス依テ原裁判ヲ可トシ右上告ハ受理セス

其他上告狀中乙第一號ニ對スル駁論アルモ原裁判所ニ於テ論セサリシヲナルヲ以テ參考ニ供スト申立タルヲ以テ無論辨明セス

第五百十八號

○入會山伐木舊慣据置一件上告判文 明治十六年十一月廿六日上告 十七年三月卅一日申渡

岐阜縣飛騨國吉城郡國府村
ノ内金桶組名張組廣瀨町組

再上告者

總代兼金桶組平民

井上利右衛門

同總代兼廣瀨町組平民

岡村俊平

同總代兼名張組平民

横井傳四郎

同總代兼金桶組平民

坂上嘉吉

右岡村俊平以下二名代言人

東京府京橋區加賀町十六番

地士族

鳩山和夫

岐阜縣飛騨國吉城郡國府村

ノ内

被上告者

瓜巢組

本件ハ被上告瓜巢組ノ起訴ニ係ルモノナリ其訴趣タル論山ハ自組ノ所有ナリシ處地券發行ノ際一旦官民有未定ノ地トナリ其後民有地ニ編入セラレシ際誤テ原被告共有ノ地券ヲ受タルニ依リ其地券ハ自組ノ名義ニ改正致度又被告組カ是迄入會ナリシモ其伐木等ノハ舊慣

アルニ依リ其舊慣ノ通り据置敢テ權限ヲ侵カ、ル様致度トノ兩點ナリ
 被上告金桶組等カ之ヲ拒ムノ旨趣ハ論山ノ一旦公有地トナリシ際原告ノ收利ニ區別ナク
 入會トシテ取調其筋ニ申出其後民有地ニ編入セラレタル節モ原告共有ノ地券ヲ受タレハ
 今ニ至テハ論山ニ對シ原告被告同等ノ權利ヲ有スルニ付右ノ請求ニハ應シ難シト云コアリ
 上告金桶組等ハ名古屋裁判所岐阜支廳ノ初審ニ於テ敗訴シ乃チ東京上等裁判所 後東京控訴
 稱ニ控訴シタリ
 此控訴ニ對シ東京上等裁判所ノ裁判結局ハ論地ハ被告瓜集組ノ地籍ニシテ原告共有地ト認
 定ス因テ被告瓜集組申分難及採用候事ト申渡タリ
 被上告瓜集組ハ右控訴裁判ヲ不法ナリトシ本院ニ上告シタリ其要趣ハ原裁判所カ上告瓜集
 組ハ被上告金桶組ニ對シ論山共有地券ノ改正ヲ要求スルノ權ナシトサレシハ不當ナリ又伐
 木舊慣據置ノ點ニ對シ判決ヲ下サ、リシハ不當ナリトノ兩點ニアリタリ
 本院ハ右第一點ノ上告ハ不成立トシ第二點ニ至テハ原裁判所カ何等ノ判決モ與ヘサリシヲ
 不當ナリトシテ之ヲ破毀シ名古屋控訴裁判所ニ移シタリ
 依テ被上告瓜集組ハ上告金桶組等ヲ相手トシ第二ノ控訴ヲナシタリ
 名古屋控訴裁判所ハ右控訴ニ對シ與タル裁判要領左ノ如シ
 被上告瓜集組 證據ノ中コ印ノ一二ホ印ノ一ハ印証及上告 控訴被告舊 乙第六號並ニ申供ヲ
 採リテ以テ論山伐木ニ就テハ舊慣アリシモノト認定シ而テ上告舊第六號ハ其文詞ノミニ依
 レハ伐木ニ就キ原被告同等ノ權ヲ有セシカ如キモ其契約ニ年限アリ且ツ伐木ハ同等ノ伐採權

タルヘキ規約アルニモ非ス又既ニ岐阜縣令ノ演達書ニ從前公有地山林先般民有地ニ確定セ
 シモ入會舊慣ハ可据置村々へ告知スヘシトノ旨アルヲ以テ伐木舊慣ヲ廢シタルモノニ非ス
 トシ其他被上告村ノ陳述ヲ採リ伐木舊慣ハ守ルヘシトノ旨趣ヲ以テ判決シ 舊慣ノ區分種々
 本行ノ 而シテ其他兩造ニ於テ証憑ヲ提供シ論辨スレハ本案主要ノ爭點ニ非スト認テ以テ說
 明セスト申渡タリ
 依テ上告金桶組等ハ此第二控訴裁判ヲ不當ナリトシテ今回再上告ヲナスモノトリ其主點左
 ノ如シ

- 一 上告舊乙第五號六號並ニ番外第一號乃至第五號証ハ既ニ伐木舊慣ヲ廢止シ且ツ其新約
 實行シタル事跡判然ナルニ原裁判所ハ右數証ヲ採用セス尙舊慣ヲ守ルヘキ旨裁判セ
 ラレタルハ不當ナリトノコ
- 一本訴論地十八ヶ所ノ内只三ヶ所ニ適セル被上告ハ印証又本訴ニ關セルノ証ナキニ
 印ノ一二又伐木ニ關セサルホ印ノ一ヲ採テ本訴ヲ裁決スルノ材料トセラレタルハ不當
 ナリトノコ
- 一 上告舊乙第五號番外第二號証ニ何等ノ裁判ヲ與ヘサリシハ上告人既得ノ權利ヲ無ニセ
 ラレトシトノコ

依テ辨明判定左ノ如シ
 右第一第三ノ兩主點ト上告狀トヲ照シ之ヲ按スル前ニ示スカ如ク原裁判官ハ本訴ヲ審判ス
 ルニ被上告ノ數証并ニ演達書等ノ理由アレハ伐木舊慣ハ廢止シタルモノコアラスト認定ス

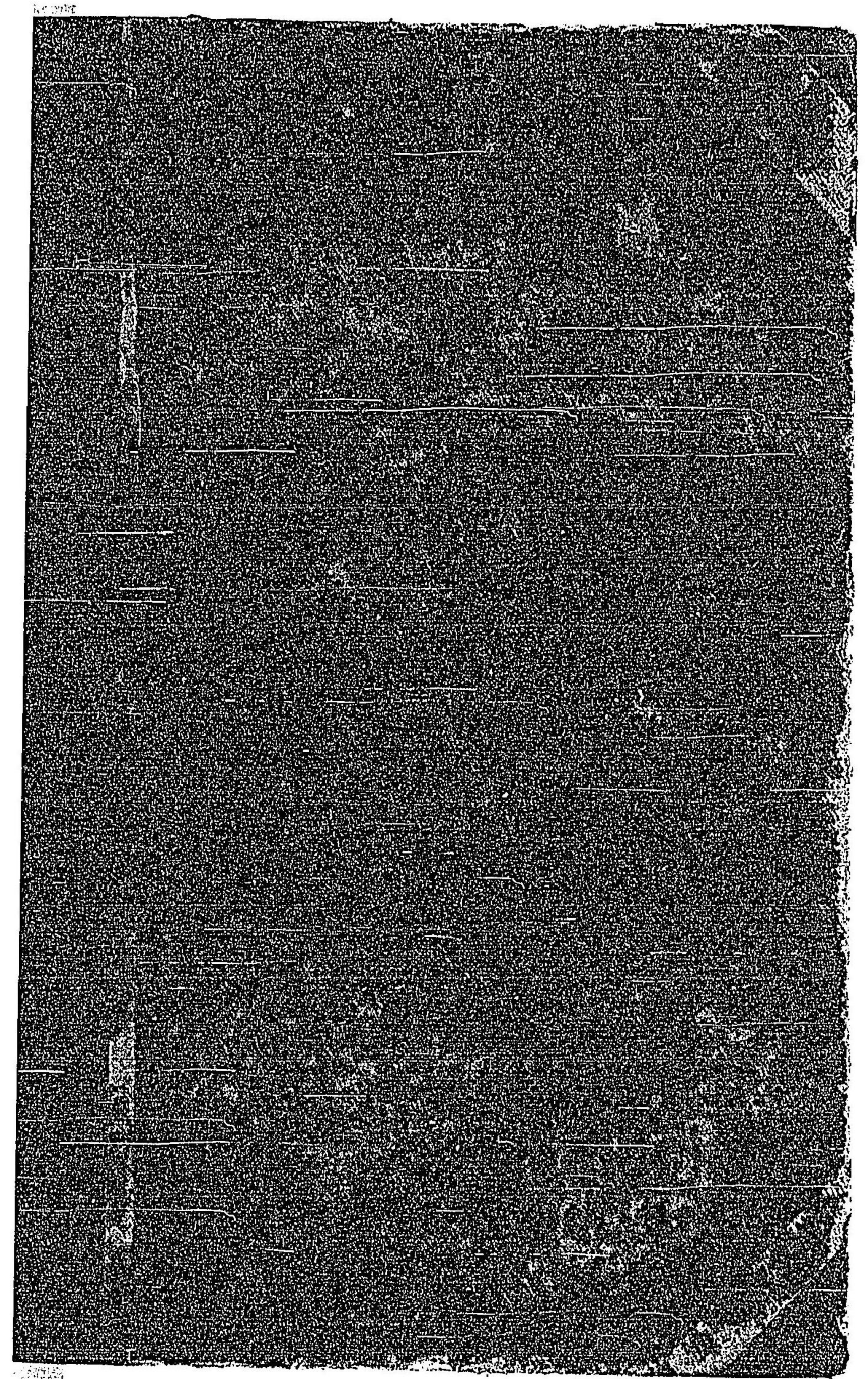
ルノ用具已ニ足レリトシ其他ノ証憑ハ争點ノ主要ニ非サルヲ以テ説明セスト判定シタルモ
ノナリ上告人ハ之ニ對シ被上告証據物演達書等ニ種々ノ解釋ヲ付シ來テ申立ル處アルモ只
其解釋見解ヲ異ニスト云ニ過スシテ破毀ヲ求ムルノ原因トナスヲ得ス又乙第五號番外第二
號ニ裁判ヲ與ヘスト申立レハ現ニ裁判但書ニ其次第記載シアルモノナレハ難相立上告ナリ
トス

右第二點ト上告狀トヲ併セテ其旨趣ヲ約スレハ本訴ニ適合セサル証據ヲ採シハ不當ナリト
云ニ過サレハ被上告ハ印証ハ其但書ノ所在ニ依レハ只三ヶ所ニ關スルカ如シトスルモ
又二印証ハヶ所ヲ示サ、ルモノニテ漠然タルカ如キモ咸ナ本訴瓜菓山ニ關スル明文アルモ
ナナレハ原裁判所カ之ヲ採テ該山舊慣ノ權義ヲ認定セシハ之ヲ不當ト云ヲ得スホ印証ハ根
アカシノフノミヲ記載シアルモ是亦該山ニ付原被ノ權義ヲ見ルニ足ルモノナレハ他ノ數証
ト併セ採リシトテ敢テ之ヲ不當トスルヲ得サルモノトス

右主點ニ照シ辨明セシヲ以テ上告狀中主點ノ外ニ亘ル分ハ別ニ辨明セス
右ノ次第ナルヲ以テ原裁判ヲ可トシ本上告ハ受理セサルモノナリ

明治十七年十二月十九日版權屆

147
1



036566-037-2

CZ-2811-10

大審院民事判決録

明8.7-14.6 14.10-17.12月
司法省

M11-19

BBR-0643



